九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

教育システム専攻FD「九州大学教育学の過去・現在・未来」 : 座談会記録（2021. 6. 2. 14：00ー16：30）

https://doi.org/10.15017/4776894

出版情報：大学院教育学研究紀要. 24, pp.33-71, 2022-03-25. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2022，第24号（通巻第67集），33-71
Res. Bull. Education, Kyushu U., Vol.24, 33-71

教育システム専攻FD「九州大学教育学の過去・現在・未来」座談会記録（2021. 6. 2. 14：00－16：30）

座談会出席者（発言順）

池　田　輝　政（学術共同研究員，元教育学部助手）
木　村　拓　也（教育計画・測定評価論，准教授，専攻長）
木　村　政　伸（日本教育史，教授）
元　兼　正　浩（教育法制，教授）
久　米　　弘（教授ストラテジー論，准教授）
田　上　　哲（教育方法学，教授）
宮　本　　聡（教育人類学，助教）
岡　　幸　江（社会教育学，教授）
田　北　雅　裕（教育デザイン論，講師）
江　口　　潔（教育社会史，准教授）
草　野　　舞（教育文化史，助教）
竹　熊　尚　夫（比較国際教育学，教授）
野々村　淑　子（教育文化史，教授）
瀬平劉アントン（臨床教育学，准教授）
藤　田　雄　飛（教育人間学，教授）
陳　　思　聡（シティズンシップ教育，准教授）
木　下　寛　子（教育環境学，准教授）
山　田　政　寛（教育情報工学，准教授）
鈴　木　　篤（教育動態論，准教授）

木村（拓）　それでは，ただ今から教育システム専攻FDを始めさせていただきたいと思います。「九州大学教育学の過去，未来，現在」というような形でFDをさせていただければと思っております。では，まず専攻長の私のほうから開催の趣旨と池田先生の紹介をさせていただければと思っております。

開催の趣旨ですが，『九州大学教育学部50年史』がございます。これが編さんされた後，『九州大学100年史』が100周年の事業として，2011年から事業が始まって2017年に完結したものがございます。この編さんにおいて部局史が大学史の中に統合されまして，大学本部としては発行を推奨しな

いということになりました。そのため各部局の記録をまとめて残す作業が，極めて難しくなった経緯がございます。

人間環境学研究院の20周年のときには，雑誌の誌ということで『20周年記念誌』が作られたという経緯がございます。あくまで，『九州大学大学院人間環境学研究院・人間環境学府20周年記念誌』という位置付けでございます。

昨年度アドミッション専門職団体の設立のために皆さまのご協力を得ながら，本学 OB であられます池田輝政先生に本学人間環境学研究院の学術共同研究員にご就任いただきました。その任期が１年迎えまして，この６月末で満了となりますことから，このような会を開催をさせていただきました。池田先生には大学アドミッション・スペシャリスト養成講座の講演で以前，国際シンポジウムを箱崎で開催したときに，箱崎のキャンパスがもう最後，移転の直前にお越しいただいて，いろいろご講演いただいた経緯もございます。このタイミングで池田先生をお招きして，教育システム専攻の構成員と座談会を行いまして，2021年現在のわれわれの取り組みを記録に残しつつ，かつ，かつての九大教育学部の思い出を池田先生にも語っていただければというふうに思っております。これをもって専攻 FD をさせていただきたいというふうに思ってます。現在のスタッフであるわれわれが九州大学の教育学として今後，目指すべき方向性などについて，これまで将来構想のほうでもお話をさせていただいて，皆さまそれぞれ相互理解を深めることをやってきたと思いますが，そういったことを目的にしております。

その他でも，少し私のほうから説明をさせていただきますと，この間，大学の法人化がありました。そして人事ポイント制度が始まりました。人事ポイントが年々本部に吸い上げられていって，そのために，本部にいろいろ申請してそのポイントを取り戻さなければいけない。そのために，部局を挙げての取り組みをしなければいけないという活性化制度があります。加えて，それに連動した概算要求，活性化制度に応募したもののなかから，概算要求を行うという，ある意味，トーナメント戦のようなものですが。そういった話が部局の中で頻繁に行われるということになりました。また，退任教員の「後任」という考え方はないということも，この間，研究院の方で，共有されてきたことであろうかと思います。ということで，小講座制で誰かが定年したらその後，後任を補充するということではなくて，部局の中で将来構想を練り上げてつくっていきながら，九州教育学会等々も含めて教育学の形をどうしていったらいいのかということを，議論をいや応なくする機会が多数，起こってきました。

この中でここ５年あたりの改革は主に国際化であるとか，国際コースの設置であるとかですね。教職課程の再課程認定を中心にもちろんそれ以外のこともさまざま，今日，ご紹介いただきますが，様々な事案を部局内で抱えながら，かなり大きな流れ，転換点を迎えてきたのではないかというふうに思っております。昨年来，野々村前部門長の下で将来構想会議を数多く実施し，そのたびごとに先ほど申し上げましたが，相互認識を深めてきたわけではございますが，きょうはそうした私たちのここ５年あたりの総括も含めまして，座談会の企画を専攻 FD としてさせていただければというふうに思っております。

ここで本日，話題提供していただく池田先生のご紹介をさせていただければと思います。池田先生は長崎県壱岐高校をご卒業後，九州大学教育学部に入学され大学院博士後期課程を単位取得退学されました。昭和53年から２年間，本学教育学部の助手をお務めになられました。本学の教育学部の OB でございます。その後，大学入試センター，メディア教育開発センター，名古屋大学，名城大学，追手門学院大学に勤務され，名古屋大学で総長補佐，名城大学で副学長，常任理事，追手門学院大学では学長補佐を歴任されておられ，現在は私，木村が理事長として設立しました一般社団法人大学アドミッション専門職協会の最高顧問を務めていただいております。池田先生には過去の話も含めて，きょうはいろいろお話をわれわれとしていただければ，大変ありがたいというふうに思っております。

過去には，小講座や研究分野をまたがって，分野横断的に共同研究が進められてきた経緯がございます。この辺りの話も後で池田先生からお聞きできるのではないかというふうに思っております。時期的には能研テストが昭和48年に終わりますが，共同研究[(1)]が，これ昭和47年ぐらいですので，能研テストの末期から共通一次の頃，ちょうど今と同じく大学入試に関する議論や研究が大いににぎわってきた時期でもあります。こうした高大接続の研究が，池田先生や中島直忠先生が大学入試センターに行かれて，私の師匠である荒井克弘先生が上司や同僚の関係であったということで，回り回って弟子である私が九州大学教育学に2016年に着任をし（それより前の2012年に基幹教育院の方に赴任，2015年から学府担当），今年2021年の４月から大学入試センターに客員教授に着任する，ということで，狭い世界ですが，ぐるぐると回っているところもありますが，ご縁を感じているところでございます。

また専攻 FD とした意図といたしましては，本日，お越しになっていただいております，木村政伸先生などは，基幹教育院のほうから教育学への参加をいただいておりまして，池田先生と学生時代からお付き合いがあったというふうにお伺いをしております。まずは，私のあいさつはこれぐらいにさせていただいて，木村政伸先生のほうから池田先生とのエピソードも含めて，会が始まる前に少し簡単にコメントいただければありがたいというふうに思っております。

木村（政） はい。池田先生，お久しぶりでございます。木村です。こういう形でお会いできるとはとても思わなかったんですけども，今，木村拓也先生から紹介があったんですけど，とても親しくしてるなんていう話じゃなくて，私が学部生のときの，もうあのとき助手を特研員っていってまして，私は，今でこそ歴史，教育史をやっておりますが，当時，最初の頃は教育行政学の研究をして，中島先生の研究室にお邪魔しておりました。そこを落ちこぼれたというのは，ちょっと教育史の世界にはちょっと申し訳ないんですけど，教育史のほうにいっちゃったんで，その後，大学院に戻ってきたときは池田先生，入試センターのほうに行かれた後だったんで，その後はちょっとお会いする機会なかったんですけど。

私が入学したのは75年で，卒業は80年，大学院が81年に入学をした頃なんですが，私が入学した頃はまだ実は学生紛争の，70年の学生運動のまだ余じんがかなりくすぶっておりました。六本松の

キャンパスにも赤いのとか青いのとか白いのとか，いろんなヘルメットをかぶった学生が闊歩して，入学した頃から先輩たちに，おまえはこの大学に何を学びにきたんだ，とか言って，えらい議論をふっかけられて，すごい迷惑というか，大変な思いをした記憶があります。教育学部も結構いろいろ大変だったみたいでですね，学生運動時代は。

そういう話も池田先生から，ちらりとありがたいお話を，薫陶を受けてきたんですけども，やっぱり一番，薫陶を受けたのは実は碁ですね。碁をかなりしごかれて教えていただきました。同じ私も長崎県出身だったんで，そういう意味では非常に親しみは感じていたんですけど，やっぱり学部生から見たら院生とか，あるいは当時の助手ですね。すごく雲の上の人だったんですけどすごく親しみやすくて，いろいろかわいがっていただいた記憶があります。きょうはいろんなお話が聞けると思います。どうぞよろしくお願いいたします。楽しみにしております。よろしくお願いします。

木村（拓）　木村先生，どうもありがとうございます。池田先生，後でまたゆっくり語っていただければと思いますので，ちょっとまずわれわれのほうから一つずつ，現在，部門のほうでどういうことが進んでおるかというところも含めまして，ご紹介させていただければと存じます。お一人ずつ先生方，自己紹介も含めまして，コメントいただければ大変ありがたいと思っております。

それでは，まず，九州大学教育学部の学校連携というところで，まずは元兼先生のほうからお話しいただければと思います。よろしくお願いいたします。

元兼　失礼いたします。教育法制を担当しております，元兼と申します。私は池田先生が九大を出られた後の教育行政学講座に入りました。昭和の終わりの話です。門田見先生や金子照基先生そして，池田先生や堀和郎先生の時代は，教育政治学研究のメッカだったと当時，伺っておりましたが，私は神田教育法学，小川教育行政学の下で育てられました。その指導教員お二人が同時に退職，転出されるという憂き目に遭いまして，それまで全くの没交流だった教育経営（教育方法学講座の一部）と組み合わされて，さらに大きく色合いが変わってきました。中段の写真（新しい研究室紀要第１号表紙を示しながら）は従前の教育行政学研究のタイトルに教育経営がくっついている，過渡期研究室紀要の表紙です。

今は教育法制研究室が教育経営学紀要を発行してるという，さらに歪な図式となってるんですけども，池田先生の時代とは研究テーマ，方法論，さらには問題関心も隔世の感があるのではないかと思います。同時に九大教育学部も90年代に大きく色合いが変わったと思います。大学院重点化という黒船に対抗する意味もあって，昼夜開講制という形で社会人特別選抜入試をいち早く開設いたしました。当時，助手として開設準備作業をしていたんですが，学校改善専修に初年次30名以上の受験者があるなど，時代の変化を予感させられた次第です。私，2003年，九大に帰還しましたときに，ちょうど九大の梶山総長と森山教育長との連携協定の下で，高大連携事業が始まっておりました。上段の写真は，学部の授業にこのように高校生が何人か交じって講義を受けてる様子です。また教育系の専門職大学院創設の議論を経て，次世代スクールリーダーを養成するマネジメント研修

を開設いたしました。詳しくは先ほどお届けしました別に作成した資料をご覧いただければと思います。私自身，教育振興基本計画作りとか，外部評価委員として県教委にノイズを発信するばかりで，十分に「御用学者」を務められていないんですけども，この春から九大教育学部の出身の吉田法稔教育長が誕生しましたので，連携を強められるタイミングではないかなと思っています。県の教育センターとは2006年に協定を交わしまして，学部の社会連携委員会の下で連携の取り組みを行っております。

教員養成系でない九大教育学部の学校ボランティア演習に注目した福岡市教育委員会と協議を重ねまして，学生サポーター派遣制度を開設いたしました。また，伊都への移転に向けて，社会人大学院の夜間サテライトキャンパスを確保する目的で，市の教育センターと連携協定を締結いたしました。ただ昨年来のオンライン活用によって，もうサテライトキャンパス自体はさほど必要なくなったんですけども，ただ，福岡市教育委員会ともようやく連携関係を構築しつつありますので，現在，新たな関係を模索しているところです。以上です。

木村（拓） 元兼先生ありがとうございます。久米先生，福岡市の教育センターのほうで授業されおられると思いますが，その様子をお伝えいただければ幸いです。

久米 久米でございます。1997年に新しい専攻科目，教育情報システムがつくられ，配属になりました。全くの外様です。当時から福岡市教育センターの情報教育部会にて，長期研修，短期研修の皆さんと一緒に連携することを始めました。残念ながら，それは途中で私自身の体調不良もあってやめました。その後，福岡市教育センターの教室を借り，社会人の大学院生向けの授業を開くことになりました。福岡市教育センターの意向で，例えば指導主事や希望する学校の教員が出席することになり，大体，毎学期２，３人の教員の方々が参加されています。普段，学部から進学した大学院生たちと，それから先ほど元兼先生がおっしゃった社会人の大学院生というのを，積極的に一緒にして授業してきました。さらに，新たに現職の教員の方々が参加され，貴重なご意見をいただくという機会を得まして，非常に個人的には楽しい授業ができていると思っています。

どちらかというと私自身は授業をつくって実践するという立場で，教育情報システムといいながら教育工学の中の教授ストラテジー論を研究するという立場で関わってきております。現在，新型コロナウイルス感染症のまん延を踏まえ，オンラインで授業をやっております。形態は変わらず，やはり福岡市の教育センターのほうから２，３人の方が応募されて，毎週木曜日，火曜日，それぞれ夕方６時半ぐらいから授業をしています。取りあえず，ここでいったん切ります。よろしくお願いします。

木村（拓） ありがとうございます。今，久米先生からご説明ありましたように，大学院の授業が社会人対応ということで，教育センターのほうで開講されております。社会人大学院として，現職の方の入学もありますが，このコロナ禍でオンラインになり，また教育センターの関係者から，授業

を教育センターで物理的にやっていない教員のほうにも受講の申し込みがあったりしました。この大学院教育のオンライン化も含めて，履修の動きが広がってるところでございます。それでは，続きまして，糸島市との連携について田上先生，お願いいたします。

田上　田上哲と申します。専攻は教育方法学になります。私も元兼先生と一緒で，九州大学教育学部出身ですが，私の恩師は名古屋大学出身の中村亨先生で，重松鷹泰・上田薫に師事された方で，こちらは授業分析をやっていて，私も授業分析をやってきております。先ほど元兼先生のお話にもありましたが，当時は教育方法学と教育経営学と一緒の講座になっていて，主任の教授は高野桂一先生で，研究室に配属されたときから教育方法学というよりも教育経営学についていろいろテキストを読んだなあという感じがあります。それと大学院の受験のときにもドイツ語がありましたが，院に入ってからも岡本英明先生にはかなりドイツ語について鍛えられたことを覚えています。

私自身，ちょっときょうお話しさせていただくのは九州大学が伊都に移転することが決まった段階で，かなり伊都に移転するまで時間かかったのですが，こちらのほうの地域とどう連携していくかということで，志摩町とまず連携するような事業が始まりました。私が九州大学に赴任したのが2007年なので，その前から実は始まっているのですが，志摩町と二丈町と前原市が合併して糸島市になって，その糸島市になってからも継続して，糸島市の教育委員会と教育学部が今，連携しております。主に糸島市側からもいろんなこちらに対するお願いごともありながら，こちらからも特に学生の教育に関して，フィールドワークなど，そういう現場を提供していただくような形になっています。できるだけ教育学系だけではなくて教育心理系も含めて，教育学部としてこれからまた糸島市，こういう状況の中でさまざまな課題ありますけども，われわれのほうで協力しながら進めていきたいというふうに思っているところです。

簡単ですが以上です。すいません，私，次の時間，人間環境学という授業の担当になっておりまして。本来，ずっとお話を聞きしたいところですが，なかなかちょっと時間が取れずに，また最後，戻ってこれたらと思いますけども，またこちら多分，録画されてると思うのでまた聞かせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

木村（拓）　田上先生，ありがとうございました。それでは，次に，宮本先生，糸島市のほうで先生がされてることを少しご紹介いただければと思います。

宮本　初めまして。現在，教育学部門で助教をしております宮本と申します。僕も九州大学教育学部出身で，2010年に学部を卒業して，その後大学院に進学しております。教育人類学を専門としておりまして，旧比較教育文化研究施設のあったところに研究室がございまして坂元一光先生のもとで学ばせていただいておりました。

糸島市との取り組みに関わらせていただいており，現在糸島市に新しく県立の特別支援学校が新設されようとしており，あと３年後ぐらいに新設予定です。先ほど田上先生からご説明いただいた

ような糸島市と教育学部の連携の枠組みの中で協力して設立とその後の運営で何かできないかで行っているところです。そういった枠組みに参加させていただきながら，特別支援学校の制度とカリキュラムなどを考えるような学際的な共同研究みたいな形で教育学部門だったら藤田先生，田上先生，木下先生といった先生方にご協力いただきながら研究プロジェクトも企画しています。糸島市はさまざまな地域性がある中で，ローカルな学習資源をいかに特別支援学校につなげていきうるのかが，教育人類学的な関心としてあるところでフィールドワークなどをしながら取り組んでいます。以上です。

木村（拓） ありがとうございます。実はこの特別支援学校，福岡県が福岡市以外のところにつくる，それが九大のたまたま近くの糸島市になります。その設置について，実は，県議会にそういった学校を新しく設置すべきだ，ということの根拠データを県の教育委員会から依頼されたのは私でございまして，それがこのような九大の側の設置という形でつながったというのは，非常に縁がつながるなと感じております。

それでは，続きまして，「地域」というキーワードでつながって，岡先生と田北先生に九州大学教育学部の「地域」との連携の状況についてご報告いただければと思っております。よろしくお願いいたします。

岡 社会教育学を専門としております，岡幸江と申します。私もこちら九大の教育学部の出身で，平成３年度の卒業になります。平成３年というのは諸岡和房先生のイギリス異動に伴う退任の時期で，私はその２年前に赴任されていた南里悦史先生の下で大学院に進みました。その後，平成21年にこちらに戻ってまいりまして社会教育を担当させていただいております。学部から大学院そして助手に至る11年間，九州大学教育学部ではさまざまな先生がたに鍛えていただいた記憶がございます。

きょうは社会教育の担当としては一番，重い仕事である社会教育主事講習の現在について，少しご紹介させていただければと思います。記録によれば，九州大学では1953年からこの社会教育主事講習が実施されております。これは1966年の社会教育学講座の開設以前からの取り組みということになります。それから現在まで毎年，全国でも有数の毎年開催大学のひとつとして，社会教育主事講習は行われてまいりました。ちなみに教育学部では，学部生に対しての養成課程にもとりくんでおりまして，これが1975年からと伺っております。

私は赴任した平成21年から，主任講師として毎年講習運営を行ってきておりますけれども，次第にこれがいろんな財産を持つ講習なんだと気づくようになりました。まずは60名近い講師陣とのネットワークがあります。関連研究者はもとより，社会教育現場や NPO など発信力ある実践家が含まれます。それから毎年，大体60人から70人の受講生を福岡，佐賀，長崎，大分，沖縄，山口から迎え入れますけれども，その講習 OB とのネットワーク。彼らは，出身エリアの教員や自治体の OB ネットワークをもつこともあり，そこから送り出されまた学びをシェアする関係が築かれています。

こうした幾重にもわたる方々とのネットワークを大学としてどうつくるかを，意識してまいりました。

さらにはこの主事講習は運営委員会を核に受講者確定や単位認定をはじめとする運営を行っていますが，これに各６県の教育委員会が入っております。本来主事講習は，県の人材養成計画の重要な一角を担うことにもなりますので，彼らをお客さまにしないで，どう実質的に連動するかを進めてまいりました。大学の行う「養成」と各県や市町村自治体が行う「研修」を，どう一体的に行いうるのか，それを大学として働きかけているわけです。そういう形でやっていきますと，最近は文科省のほうからも注目されるようになりました。文科省との意見交換もかなり進みつつあるという感があります。

近年新たな動きがあり，去年から社会教育の資格の在り方，それからカリキュラムが大きく変わりまして，社会教育士という呼称が始まるようになりました。これまでは自治体の教育委員会，事務局にのみ社会教育主事の発令は行われてきましたが，社会教育士の場合はNPO，企業，福祉施設あるいは行政他部局，どこにいっても社会教育士を名乗って，教育の力量を持って地域，社会で活躍するという在り方が，新しい方向として出されてまいりました。そのため，オンライン受講の導入を含め，この新たな体制に向けての転換を図っているところです。

社会教育はもとより，主事講習自体もいっそう地域の多様なアクターとの連携が求められるようになっています。これはこの間，九大主事講習として進めてきた方向性に合致するものとして，行政のみが担うのではない，社会にひらかれた社会教育の展開，そのための各分野との連携を一層進めていきたいと考えております。私自身もNPOボランティアを研究の一つにもしていることもあって，社会教育の研究者の中でもNPOとの連携が強い研究者とされていますが，さらに教育学部には教育デザイン論の田北先生がいらっしゃいます。田北先生にも，講師陣としてはもちろん，運営委員会にも加わっていただきながら，九大が全国の社会教育士の実践とネットワークのモデルの一つをつくっていく勢いで，九大らしい展開を望もうとしているところでございます。以上です。ありがとうございます。

木村（拓）　岡先生ありがとうございます。田北先生，ひと言いただければと思います。よろしくお願いします。

田北　はじめまして，教育学部門で専任講師をしております，田北雅裕と申します。私は学生の時は教育学を専攻していたわけではなくて，まちづくりやデザイン，特に環境デザインを学んでおりました。ご縁があって2009年にこちらの部門に赴任してきまして，当時は統合新領域学府ユーザー感性学専攻といった学際性の高い専攻の専任だったんですが，2015年から教育システム専攻の専任になりました。私はまちづくり・地域づくりという観点から関わってるプロジェクトがありますので，いくつかご紹介させていただこうと思います。

先ほど岡先生から社会教育のお話が出ましたけれども，例えば，地域との関わりの中で社会教育

施設が今後どうあるべきかを提案したり，市民と共に施設づくりを進めるプロジェクト等に関わっています。直近のプロジェクトですと，福岡県 N 市で20年以上，運営されている図書館と文化ホール等が一体になった文化複合施設がありまして，それが2024 年のリニューアルに向けて建築設計が進められています。その中で，教育委員会を核にしながら庁内で部署横断の体制づくりを提案したり，建築家やグラフィックデザイナー等の外部の専門家と協働してビジョンを提案したり，市民参画の仕組みづくり等に取り組んでいます。

また，先ほど話題に出ました糸島市教育委員会との連携事業も2010年ぐらいから関わっておりまして，ここ4年ぐらいはスクールソーシャルワーク事業の調査研究に取り組んでいます。連携事業の文脈を生かしながら，授業「教育学フィールドワーク研究演習」の中で，学生と共にフィールドワークやインタビュー調査などに取り組み，教育委員会に対して，課題改善の提案等に取り組んでいる次第です。

以上のような社会教育や学校教育との関連以外でも，私の研究室では地域連携のプロジェクトに複数取り組んでいます。例えば，福岡市内の不動産会社から，所有物件を地域の子育て支援施設として活用したいという相談がありまして，それを行政や地元住民，周辺大学や NPO 等と連携しながら地域に創出していく，そういったプロジェクトにも取り組んでいます。私は教育学が専門ではないんですが，その強みを生かしながら，教育学の周辺領域と連携しながら教育・研究に取り組んでいる次第です。

木村（拓） 田北先生，ありがとうございます。

それでは江口先生と草野先生から教職課程の運営状況についてご説明いただければと思います。よろしくお願いします。

江口 江口潔と申します。よろしくお願いします。３年前に九大のほうには来まして，教職を主に担当しておりまして，研究室は教育社会史のほうを持たせていただいてます。出身は中央大学というところで，金子茂先生が九大出られた後にこられて，指導の教員は違う方だったんですけど，大学院，丸々，薫陶を受けることができておりました。

それで教職のほうですが，画面共有させていただいて簡単に説明させていただければと思います。九大型の教職課程というものを構築するということで，木村拓也先生がこういったことをいろいろ申請の段階から取り組んでいただいたんですけど，高等学校の教員を主なターゲットにしてるっていうことがありまして，右側の図にあるように優秀な高校教員を要請して，優秀な高校生の進学を促して，研究者の礎を築いていこうというようなことが背景にあります。それとあとまた大学ランキングなどで高校教員の評判調査などもありますので，そういったところに関わるものとして，ちょっと大きく中身を変えていこうということがありました。近年の主な取り組みとしては新教育職員免許法の施行が2019年にあったので，それに伴うカリキュラム改革があり，また地域連携とグローバル化の対応ですね。それとあと教員採用試験の対策といったことを課題にして進めてまいり

ました。

次のところ，細かくは説明できないのでイメージだけですけど，左側のところで言おうとしたのは低学年次ですね，１，２年次から教職に関わるようなことっていうのをカリキュラムで進めてまいりました。それから右側のほうは履修に関して，理系学部と文系学部が離れてることなんかもあって，なかなか履修，不都合なところもあるので，履修しやすくするための改革というのもこの間，行ってきたということです。このような形で教職なカリキュラムもだいぶ変えてって，高大連携につなげていこうということを考えておりました。

それから，その中の学校インターンシップという，教育実習以前に２年生，３年生の段階で学校現場に入れるようなものも取り組んでおります。前年から，右側にスケジュールありますけど，前年の２月から始めて，実際に12月までのところでインターンシップをやって，事後講座までを行っていくというような形になっております。内容的には左側の表の一番下に書きましたけど，学校行事の補助であるとか，授業補助であるとか，そんなことに参加させていただいて，学校との結び付きをより強めた実習ということを行っていくと，このようなことを行ってまいりました。

実際，その地域の連携ということですけれども，参加学部は左上のとこにあるように文学部，理学部も多くおりまして，教育学部ではない取り組みになってるということです。協力校のところでも，福岡県あるいは糸島市から多くの学校さんにご協力いただいているんですが，また木村拓也先生にご尽力いただいて，中国やタイにも受け入れ校をつくっていって，こういったインターンシップを通して，地域との連携，それから海外への進出，こういったことを考えているということです。ちょっとコロナの関係がありまして海外のほうは実際にはできていないんですけれども，少なくともプランなんか送っていただくようなことはしておりまして，連携は続いているということになっております。

他にも地域連携で例えば教育実習であるとか，各種の教育実習関係の事業でも，多くの福岡県の方や糸島市の先生がたにご協力をいただいて，あるいは福岡市と教員養成に関する連携を結んだり，地域の教育関係者のかたがたと密な関係を築きながら，教員を育てるというようなことをやってまいりました。ですので，この教育実習の模擬授業の協力ももう３年ほど続いてますけど，九大の OB の方にボランティアという形で10名近く，毎年，参加していただいているというようなことをやっておりまして，地域との連携，あるいは OB との連携ということを深めているということになっております。

最後に教員試験対策講座というものも行っておりまして。今，修猷館高校を出られた元校長先生の高島先生にお願いしてこのような形で対策の講座をつくっております。試験の対策を一応やってるんですけど，それ以外にも現場にいらっしゃった方なので教員としての心構えを伝えていただいて，教員としてより現場に適応したところで，どういう課題を考えられるか，そんなことをやってもらうようにしておりました。

実際に対策講座，見てみますと，大学院生から学部生までしかも文学部，理学部を中心に20名台から40名台ぐらいの学生がきておりまして，さらには卒業生も対象にしてフォローしているという

ことになっております。このようなことをすることで，教育学部だけじゃなくて他の学部やあるいは大学院との連携を深めると，このようなことを進めているというのが現状であるということです。駆け足の説明になりましたが，教職のほうは以上になります。

木村（拓） ありがとうございます。草野先生，何かひと言，助教の先生の関わり方も含めて，よろしくお願いします。

草野 教育システム専攻で助教をしております，草野と申します。私も九大の教育学部の出身で，そのまま修士，博士とお世話になっています。専門は教育文化史です。助教としては一昨年の12月から勤務しているんですけれども，教職に関して私も少しお手伝いをさせていただいております。先ほどの江口先生のお話とほぼ同じにはなるんですが，教育実習の前の模擬授業であったり，学校インターンシップであったり，現場の先生の関わりであるとか，実際に学校に入っていく機会が増えてきているなというのが，学部時代から教育学部の授業を見てきての私の率直な感想でして。実際に今，受講している学生にも好評だというふうに伺っているので，すごくいい機会になっているなと勝手に思っているところです。

もちろん学校現場の先生がたのお話であるとか，実際どういう問題，学校現場でのどういう課題があるのか，そういったところは私もまだ勉強すべきところが多くあるので，本当に実際に受講している学部生とかはもちろんなんですが，私自身もたくさんのことを今，学ばせていただいています。

木村（拓） それでは，続きまして，国際化の状況ということで，まず竹熊先生のほうから概要というかアウトラインを示していただいて，あと個別に野々村先生，アントン先生などに補足いただければと思っております。

竹熊 竹熊です。ご無沙汰いたしております。よろしくお願いします。二つほど，ちょっと使い回しで申し訳ないですけども，教育学部の国際化ということについて，ちょっといくつかご説明させていただきたいと思います。一番，大きなのは先生がおられた頃の教育学部には比研（教育学部附属比較教育文化研究施設）っていうのがあったと思いますけども，比研は96年に解体されてしまいましたので，当時，国際化っていうのが個々人の先生方とそういう比研をベースにした形で進んでいました。今はどちらかというと全体で組織として国際化を進めているというような状況です。それと共に時代の背景の変化によって，研究だけではなくて，教育に国際展開というのが加わってきました。図にありますように国際入試と国際コースというのをほんのちょっとなんですけれども始めています。ただこれは小さい学部ですので，かなり大きなインパクトがこれからあるんではないかと期待してます。その初めをコロナによってちょっとこけてしまいそうですけれども，何とかこれをまた立ち直ってやりたいと思ってます。

この他，教育学部，教育学部門としてリサーチトライアル，台湾スタディーズプログラムといろんな海外提携校とつないで，いろんな研究交流，教育交流をしたいというふうに考えてます。私のほうでは国際的高大接続ということも自分のプロジェクトの中に一つ，入れてましたので，そういうことも絡んで海外の高校とも，木村拓也先生と一緒させていただいて，協定を結んで，先ほど教職課程のほうでありましたように，教職課程のコースであるとか，あと教育研究でつながっていきたいと。教育学部はもともと九大は付属学校を持ってないっていうところが発展を阻害していると思います。これについてどうやって対応していったらいいんだろうってことを考えてまして，それを海外のほうにでもつなげてもいいんじゃないかっていう形で展開をしています。学部教育とかもそういう形で交流していって，これは木村先生のほうで作っていただいた資料ですけども，いろいろな歴史的な経緯から海外との連携を行っていますというご紹介であります。

ご報告は今は，いったんここまでとします海外フィールドワークというのをかつて，韓国でやったりもしたんですけど，これもまた組織化しまして，海外フィールドワークという形で整備して，学部教育とかあと大学院生も巻き込んだ形で進んでいこうというふうにしてます。あと，ここに後でご紹介あります陳先生とか，あとビッカーズ先生とか，以前は韓国人の留学生が多かったんですけど，それから中国人の留学生が今とても多くなって，中国人の助教，陳先生はもう准教授で採用されているという組織の国際化っていうのも進んできてます。ここにいるアントン先生も共創学部のほうから兼任いただいてますけども，そういう形で組織の中での国際化を進めながら，研究と教育の国際化を進めようというふうにしております。以上，簡単ですが。

木村（拓） では次に，野々村先生のほうから台湾など，部局間交流協定の状況をお願いします。

野々村 野々村と申します。私は1998年の10月に赴任しまして，教育史を担当しております。金子先生の後ですけれども，その後ポイント制となり，今は小講座はなくなっている状況です。私自身は18世紀イギリスの救貧事業から子どもや家族について歴史的な考察を行っています。それは少し置いておきまして。

私がここでお話しするのは，一つは中国で一つが台湾についての国際化なのですが，両方とも，九大がスーパー・グローバル・ユニバーシティーに指定されて，部局での国際化プログラム開始のための学内資金助成を受けての部門長としての仕事です。華東師範大学とは権藤先生が80年代に部局間交流協定を締結されており，2016年から17年にかけて何度も，木村先生，藤田先生，ビッカーズ先生，竹熊先生，他の先生方も含めて，何度も中国に行き，その協定再締結の運びとなりました。その後フィールドワークや高大接続なども含めて上海との交流を続けてきました。大学間交流も締結してほしいという要請が先方よりあり，かなり時間がかかったのですが，昨年，他部局とネットワークを構築し大学間交流協定を結んだというところです。

さっきも竹熊先生がおっしゃっていましたけれども，やっとのことで締結したのにコロナで中止という残念なことになっています。でもフィールドワークは３回ほど，木村先生とか藤田先生，陳

先生たちと実施してきました。

もう一つが台湾スタディーズ・プロジェクト，すなわち台湾講座です。今サバティカルでここにいないのですが，ビッカーズ先生が中国研究者として窓口となり，前原志保先生という台湾研究のスペシャリストを中心に，台湾の教育部とのマッチングファンドで事業を実施しています。これも部門長の役回りとして，台湾講座の設置と再締結のサポート，交渉役として何度も台湾領事館に行っています。台湾講座としてどういう取組をしているかというのは，ちょっと時間もありますので，後ほどチャットのほうに入れさせていただきます。以上です。

木村（拓） ありがとうございます。補足いたしますと，大学間協定までやったのは華東師範大学でございます。部局間協定の方は，陳先生が締結しました南京師範大学，私が締結しました北京科技大学，これは日本語学科のほうですけど。それとビッカーズ先生が台湾師範と協定を結んで現在，大学院のほうでダブルディグリーを構想中ということと。あと，これもヴィッカーズ先生が締結されましたが，香港師範大学です。これらの大学になりますが，現在，アジアを中心に協定を結んでいるところです。

野々村 そうです。そのアジアが中心なのですが，アジアを対象とするというだけではなく，九州がアジアと西洋の玄関口であるということ，クロスアジアというコンセプトを進めていこうというのを皆で考えているところです。以上です。

木村（拓） 上海に行くのに東京とあまり飛行機の時間が変わらないというような，「アジアのゲートウェイ」としての「九州」という地理をどうやって生かすかというところも，皆で話し合いながら進めてきたところであります。

続きまして，アントン先生のほうで実施されておりますアテネオ大学との連携について，少しコメントいただけますか。

アントン どうもこんにちは。初めまして。瀬平劉アントンと申します。よろしくお願いします。私は教育哲学のほうを担当させていただいております。また，臨床教育学の研究をしています。前の方のお話と比べると結構，微力なんですけれども，フィリピン，母校であるアテネオ・デ・マニラ大学という私立大学，１位を争ういい大学なんですけれども，その大学の哲学と手を結んで，毎年，コロキュウムを開いてたんですけれども，Kyudai-Ateneo Philosophy and Education Colloquium という話だったんですが，というネーミングだったんですけれども，そういう教育学と哲学の内容を自由に英語で語り合える場として使わせていただきました。

そこで，３年間続きましたけれども，いったんコロナで途切れたんですが，九大の学生も学部生も来るんですけれども，主に大学院生で，先生たちも陳先生，藤田先生ももちろん一緒に開催していただいておりますんで，藤田先生も陳先生もビッカーズ先生も基幹教育院のローレンス先生も英

語で発表していただいたこともあって，そこで各先生の班の学生さんたちも英語でチャレンジして発表してみる場として（####@00:51:57）してみたんですけれども，そのようなプロジェクトがあります。今，実はアテネオで始めて教育学部がやっとできましたので，もしかしてこの協力も新しい方向で発展するのかなと期待しております。以上です。

元兼　韓国の公州大学校とは2010年に連携協定を師範大学（いわゆる教育学部）と結んでおります。その後，公州大学校のFDを活用する形で2012年から国際学術フォーラムとか，現地交流を開始しております。今年でちょうど10年の節目を迎えるところです。この取り組みでは英語に頼らずにお互いの言語，お互いの文化を理解しあおうということで双方向イマージョンプログラムを目指して行っております。この事業自体が院生たちにとっては国際交流のファーストステップになってるんじゃないかというふうに考えております。今はコロナウイルス感染拡大でなかなか難しいんですけども，その中でできることは何かということで教科書作りとか，研究協議を今一緒に行ってるところです。以上です。

木村（拓）　ありがとうございます。それでは私のほうから。木村拓也と申します。2012年に九州大学基幹教育院に着任し，修士課程を2015年から，博士後期課程を2016年から担当しております。2016年の途中から，人間環境学研究院（教育学部）の方に異動しました。教育社会学を担当しております。

では，私の方から，高大連携，高大接続の状況に関して説明をしたいと思います。高大接続の状況ですが，藤田先生と一緒にEEPという学内経費を取りました。これ2015年になります。高校生に研究を体験してもらって研究者を目指すという目的で，毎年オープンキャンパスの翌日に講義とゼミを行うという，リサーチトライアルという授業を始めてます。2016年からは，教育学部の方から，全学の教員にお声掛けしまして，先ほど竹熊先生のほうからも少しご紹介ありましたが，海外での日本の高大，海外において日本の高大連携活動が通用するのかというような，進路意欲を喚起するとか，そういったことを裏テーマとして，海外でのリサーチトライアルという，海外高大連携事業というものを行っています。その関係で先ほど中国信男教育学園という名前が出ておりましたけど，ここは竹熊先生の研究室のご出身の方が理事長をお務めになっているということで，さきほど，付属校の話も出ましたけど，有機的に機動的に連携ができる学校を海外にもつくろうというところでやっておるところでございます。

もう一つが福岡の柳川市にあります私立柳川高等学校です。ここは先ほど竹熊先生のほうからもご紹介ありましたが，タイに付属中学を持っておりまして，この学校と協定を結んで学生を実際，タイに引率して，現地の授業を見るとか，向こうで一緒に日本語の授業をするといったようなことで，海外フィールドワークという形で提携を結んでやってまいりました。これも海外高大連携という新しいジャンルを，教育学としてどうやって開いていくのかというところがテーマになろうかと思います。現在オンライン，コロナ禍でオンラインでのやりとりになっておりますが，柳川高校附

属タイ中学のほうではタイ教育省の私学局と MOU を結んでおりまして，タイの全土に日本語の授業を届けるということで，タイのランシット大学の学生10名と九州大学の学生が20名ぐらい，合計で30名ぐらいなんでが，オンラインで日々ミーティングをして，日本語の授業を提供するということをやっています。

その他，ベトナムでは日本国際学校，モンゴルでは新モンゴル学園さんと交流をさせていただいています。ここまでが高大連携，高大接続の状況で，今までの国際連携も含めて多分，部門や専攻の先生たちがいろいろ重なって，グループをつくってやっているというところであるかと思います。

木村（拓） それでは次，課題探求系列から教育フィールド研究系列のほうで少し話をさせていただければと思います。昨年度，ご退官された吉本圭一先生から，専門性の観点から，私の方で，キャリアのインターンシップであるとか，キャリアの講演会（キャリア研究セミナー）を引き継がせていただきました。その中で去年，議論していく中で，インターンシップとかボランティアっていう言葉がかなり長く使われてきたということで，古びた言葉になっていやしないかという問題提起をさせていただきました。

例えば学生がボランティアに行くんだとか，インターンシップに行くんだという態度が，こちらが教育的な働き掛けを行う前にできてるんだったら，言葉に引っ張られているのではないか。それだと，もったいないんじゃないかということです。就職のためのフィールドワークという観点が定着しすぎると，大事なことが漏れ落ちる。ボランティアに行くということが，現場の真実を見落とすことになりやしないか。そういう問題意識です。

であれば，教育のフィールドに入って調査をして卒論を書くということが，学部のディプロマポリシーやカリキュラムポリシー上，最終目的にあるのであれば，純粋にそちらに合わせた教育カリキュラムに変えたほうがいいんではないかと考えた次第です。

先ほど，ちょっと木下先生に聞いたんですが課題探求系列という，フィールドワークとかボランティアとかインターンシップっていうのを，正式には2002年にスタートしたそうです。試験的なスタートは2001年で行ったと。つまり20年ばかりその枠組みで続けてきた，教育のフィールドに出掛けていくという取り組みがございました。先ほど田北先生のほうからも少しその案内があったかと思います。今年度からは「教育学フィールド研究系列科目」と名前を変えて再スタートさせました。

合わせて私のほうで社会調査士，専門社会調査士の課程も重ねてスタートさせております。

そこで，新たに，「教育学フィールド研究系列科目」と社会調査士科目の入門科目を兼ねまして，オムニバスで「教育学フィールド研究入門」を教育学系で苦労の末，立ち上げました。昨今，大事になっております研究倫理やフィールドの安全教育，入り方などの話から，教育者としての構えや振りの話を，これをまた藤田先生していただいたり，質的調査法や量的調査法。比較教育，あるいは人類学的な方法。授業研究，教育ストラテジー研究。地域の入り方等々。今，先生がたにご紹介いただいた話を網羅的に２年生の春学期，４月５月に集中的にオムニバスで聞かせて，教育のフィールドの入り方を身に付けていただこうというようなカリキュラム改革，そういった科目群の設置と

いう改革を数回にわたるワーキングという実質的な教員 FD をさせていただきました。その中でこれまでボランティアやインターンシップやフィールドワークという形で携わってこられた先生がいらっしゃいますので，まず簡単にひと言いただければと思います。ここで藤田先生にボランティアの話をしていただいてもよろしいでしょうか。

藤田　すいません。教育哲学を担当しております藤田です。着任が2012年，土戸敏彦先生の後に着任する形になりました。非常に，ボランティア演習担当させていただいてたんですけど，純粋に理論系の教員として着任していたこともあって，最初ボランティア入るっていうのはすごく僕の中では刺激的で，自分自身の今までにない経験ということで，楽しみながらやらせていただきました。特に元兼先生と田上先生という，ディシプリンが異なる先生がたと一緒に，教員だけではなくて院生も含めて，学部生が入っているフィールドについて議論していくっていう場は，学際的な研究の何となく素地がそこで学部生にまで広がるような，非常に意味のある場だったなというふうに思います。それが現在も継続して行われていますし，フィールド研究入門という形でより広い枠組みとしてつくっていただいているというような状況だと思います。継続してそのような体制が続いていくっていうことを，すごくありがたく思っております。以上です。

木村（拓）　ありがとうございます。それではフィールドワークのほうは岡先生でよろしいですかね。

岡　フィールド，現在はフィールド研究演習Ｉという形で行っておりますけれども，主に糸島をフィールドとしながら，異なるディシプリンの教員がいくつか部屋を立てて，そこに学生たちが入ってきて，実際に糸島をフィールドに研究やフィールドワークを行う授業をやってまいりました。先ほどの藤田先生と同じで，間に報告会を入れていったりしますので，やっぱりそれぞれのアプローチに学んだり，ディスカッションする機会も非常に有益であったなというふうに思っております。また，今もお話もありましたけれども，今年から新しい枠組みになったところで，入門が今，終わったところですけれども，受講生の関心も一律に高くなってるなと感じます。希望する人数も増えたってこともあって，枠組みを新しくつくったことがいい方向に向かっていると個人的には考えております。以上です。

木村（拓）　ありがとうございます。最後に私，木村のほうからインターンシップの話をさせていただければと思います。今，「教育と職業演習」という形でインターンシップという名前を使わずに行っています。「インターンシップ」と聞くとちょっと前までは大学の中であまり見かけなかったのですが，吉本圭一先生のご尽力の賜物だと思いますが，今では，大学では，学生のかなりの人数が，企業のインターンシップにいってますので，教育学に固有のインターンシップに限定しようということで，去年あたりから，実習先を厳選して，演習をしております。

教育，かっこ付き「教育」というものがどういうふうにつくられていくのかっていうのを，行政とか民間とか政治の三つの側面に分けまして，行政は福岡県庁とか文部科学省とか国立教育政策研究所のインターンに，民間のほうは自動車学校とかフリースクールとかNPOとか，そういった教育が生起する現場に，学生を派遣をしております。また１条校ではない専修学校のほうにも派遣をして，学校とか教育というものを多角的に見えるように，そしてまた教育に関心を持ってる福岡の市議会議員の先生にご紹介いただきまして，事務所に突撃をして，営業いたしまして，教育学部生にインターンシップやらしてください，ということで，熱く語ってきました。そういうことをしながら，学生には，２カ所インターンシップに行ってもらい，一つの物の見え方，例えば公務員になりたいから福岡県庁に行かしてくださいだけではなくて。もちろん，それもいいのですが，それ以外にいろんなところにいって，「教育」がどういうふうにつくられていくのかということを，学生に多角的に見ていただくというような授業設計にしております。

陳先生，次に副専攻の状況，その次に木下先生，コモンズの状況を教えていただければと思います。よろしくお願いします。

陳　陳思聡と申します。2018年に着任して異文化間教育論という専門科目を担当しております。自分の専門はシティズンシップで教育すね。そして私が担当してるのは文系４学部の副専攻プログラムというプログラムです。そのプログラムのホームページがありますので，ちょっと画面共有をさせていただきます。このようなプログラムがございます。それも2018年から開始したものです。この文系４学部は教育学部をはじめ，文学部，法学部そして経済学部がそれぞれの科目を体系的に組んで，そして互いに開放して，そして４学部の学生に体系的に授業を提供するというプログラムでございます。

この副専攻プログラムの中には２種類のプログラムがあります。一つ目は横断型プログラムですね。それは一つのテーマによって４学部の関連のある授業を組んで，提供するという形です。教育学部が責任部局として担当してる，そして私が担当してるのはクロスアジアの人間と社会というテーマで，そしてそのプログラムの必修科目の一つを担当しております。

そして，もう一つ種類のプログラムは専門領域型プログラムですね。それは他の部局の学生に教育学部の内容をまだ正式的に，そして体系的に自分の学部に籍を置いたまま，教育学部の内容を学ぶことができるというような専門領域型プログラムがあります。そして2018年に発足して，今年の３月にやっと１期生が卒業しました。そして目標としては各学部の20パーセントの学部生がこの副専攻プログラムに登録して，履修できるように，今，頑張っております。今はもう20未満ですので，どのようにより多くの学生がこのプログラムを担当して，履修して，そしてより学際的な視野を身に付くことができるのかを，今，いろいろ考えて進んでいるところです。以上です。

木村（拓）　ありがとうございます，陳先生。それでは，木下先生，よろしくお願いします。

木下　池田先生，こんにちは，初めまして。木下と申します。教育学部に昔おりました。実は教育学部の中でもこちらにおられる教育学のほうではなくて，もともと心理学のほうを専攻しておりまして，その後，建築のほうとかを経由して，その後ぐるっと回ってまたここにちょっと戻ってきたというような感じになります。ちょっと違う着地点になってるって感じですけども，そういう感じになっております。

私のほうが担当しておりますのが，今回，お話をっていうふうにいただきましたのが，学際ということとコモンズという場所の話です。私自身は教育環境学という，ちょっとこれも今から，名前は付けてもらったんですけど，何をするのかっていうと今から決めますという感じなので，ちょっと自己紹介としてはなかなかまだ難しい状況ですので，もうコモンズの話を簡単にさせていただきます。九州大学の教育学部は結構，長くの間，人環，人間環境学という形で，いろんな領域との学際を進めてきました。これが教育学部を中心に健康スポーツ科学とか，それから文学部のうちの社会学とか人類学とかと一緒に。あとそれからもう一つが建築学との連携を進めてきたというところです。

こちらのほうでずっとかなりの長い時間の歴史を重ねてきて，学際っていうことについてもかなり充実してきたかと思うんですけども，ここ３，４年前，陳先生が先ほどお話しされた副専攻の話っていうのを先の専攻として，その次に研究も進めていったほうがいいんじゃないかということで，学際的にできるだけ進めていくのがよいんじゃないかということで，文系４学部ですね。工学部，人文，それから経済，それから人環ということで，文系というか，この中に建築も含みますので，文系とも言い切れないんですけども，この四つの中でできるだけ学際的な研究を進めていけるといいですよねという構想を立てていくセクションのような形で，そこの担当として私は今，着任しております。ちょうど半年になります。

こちらのほうでずっとやってきたこととしましては，私自身がちょっと着任する前のことも含めますけれども，特に教育学部等が中心になりましたのは，先ほど何回も強調しておられた話かと思いますけども，アジアと九州，アジアに開かれた九州っていうことをメインのテーマとして，ここで研究のできるだけいろんな先生がたとの展開を進められるようなプラットフォームをつくれればというふうに計画しております。

こちらも着任前だったんでちょっと分かったようなふりをしてしゃべりますけれども，2019年３月にアジアの都市化と生活者っていうシンポジウムとかをしまして，福岡アジア都市研究所との連携等をしております。それからついこれからなんですけど，７月に都市建築学部門の先生等にお声掛けをして，一緒に博物館の先生とも一緒に，できるだけ学際的で，しかも理系の先生がたとも話ができるような楽しい場が持てればということで，ちょっと突然ですが棚田というテーマをおきながら，一緒にやっていくということで，できるだけ具体的な話をすることで，いろんな先生たちと理系の先生も文系の人たちも，とにかくいろんな形でコミットできるような場をつくっていければというふうに考えております。

今後，その中でさらに今，ここは文系のゾーンっていう形で主にいわれてるんですけども，プラ

スアルファでウエストゾーンと呼ばれるほうですね。ウエストゾーンっていうのが理系のほうになりますけども，そちらの理系の先生がたとも仲良く楽しくいろんな研究の議論ができていくような形がないかっていうことで，今，その展開をしていくところです。これに関しまして，今の副専攻の陳先生と一緒に，その他，岡先生，藤田先生とかにも中核に入っていただきながら，一緒に準備を進めていってるというところです。ということで，以上になります。

木村（拓） ありがとうございます。それでは最後になりますが，基幹教育院との連携ということで，木村政伸先生，アントン先生，山田先生，からひと言ずついただければと思います。

木村（政） 木村です，どうも。また回ってきたんですね。教育の大学院は担当してるんですけど，本籍っていうかホームは基幹教育院っていうところにおりまして，私とアントン先生，それから山田先生の３人がそちらのほうに所属しながら，大学院も担当してるということでやっております。

山田 池田先生，初めまして。山田と申します。基幹教育院にいます。基幹教育院，山田が３人いるんですけども，教育のほうを担当しております。専門は教育工学といわれるところで，卒業は，久米先生と同じ外様っていうふうに表現されてましたけども，東京工業大学というところで教育工学をやっておりました。池田先生のお知り合いでいうと，永井先生，首都大学の永井先生が先輩筋に当たります。赤堀侃司先生のとこでお世話になりました。専門は教育工学の中でもグループワークを支援するシステム開発で，教育学にいていいのかどうかよく分からないんですけども，情報工学のアプローチから教育・学習環境のデザインと開発，評価に関する研究をずっとやっております。

最近はラーニングアナリティクス研究を行っており，文科省からも高等教育のラーニングアナリティクスは九大が引っ張ってやりなさいというふうに言っていただいたんですけども，ラーニングアナリティクスセンターの立ち上げなどラーニングアナリティクスに関わることに関わっております。今朝も授業やってきたんですけども，具体的には，授業しながらどのスライドに何人，どの辺のスライドがみんな分からないのかっていうのをリアルタイムで分析して，そのページに詳しく説明するだとかといったラーニングアナリティクスと組み合わせた授業設計とかの研究とかをやっております。

教育学部，人環との関係性でいうと，そんなに深く関わっているわけではないのですが，私は幸いに新入生オリエンテーションで教育学部の１年生を担当しております。まだ教育学部のほうではあんまり出てないのですが，最近，九大を含めたいろんな大学では，精神的に大学へちょっと行くのが厳しいだとか，そういう学生さんっていうのが増えてまして，そういう事案が出てきたら教育学部の先生たちとタイアップして，窓口になって協力してやっていきなさいと全学的に今なっております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

木村（拓） ありがとうございます。アントン先生。

アントン　すいません。何ていうんですかね。私はここでそこまで連携に貢献してない気がしますけど，さっきのアントンと申します。私，連携といえば連携なんですけれども，木村政伸先生が班長としてリードしてくださっています基幹教育セミナーという授業がございますけれども，私はかなりそれを研究の場兼ねて実験の場として使わせていただいて，ナラティブ教育，物語的自己同一性の教育をそこで行っております。

木村（拓）　ありがとうございます。私，木村も，もともと基幹教育院に在籍しており，教育学の方に異動してきましたが，全学教育の関わりの中で部局，教育学のところだけが孤立してるわけでもなく，全学の先生たちともいろいろ連携しながらというところがあります。あと藤田先生と私は，教育改革推進本部という本部組織にも併任でいたり，教育学の中だけではなくて，学内のいろんなところとも連携をしているというところかと思います。

それでは鈴木先生，すいません，最後になりましたが，この４月から新任ということで，全体の話を聞いていただいた後になりますけど，ひと言，自己紹介をいただければと思います。

鈴木　初めまして。鈴木篤と申します。２カ月前に着任しまして，私自身，まだ大学には何も貢献できておらず，大学がこれまでどのようなことを積み上げてきたのかというのも，今，学んでいる途中なのですが，池田先生に向けてのプレゼンを先生方がされてるのをお聞きする中で，こうやって（様々な取り組みが）積み上がってきていたんだなと，私自身，勉強させていただきました。私自身の出身は学部が大阪大学人間科学部，大学院が広大教育学研究科，その後，勤務が兵庫教育大学と大分大学ということで，かなりいろいろな大学をさまよっているというような状況です。私自身の専門としては教育学という学問ディシプリンを科学史の観点から分析するというのと，教育というシステムと社会のシステムの関係性を考える，また学校教育とりわけ道徳教育や学級経営を理論的に分析するというような三つの柱で研究を進めております。

先生方がいろいろなことに取り組まれている中で，私自身も九大の教育学部，教育学の研究の発展にどう貢献していけるのかなと少し悩んでいるところではあるのですが，私自身はこれまで大分大学で働く中，修士課程の教育学研究科が閉じられていき，そして教職大学院に全国の地方国立大学の教育学研究科が置き換わっていくという（ここ数年間の時代状況の）中で，教育学研究の土台や（知的・人的な）供給源がかなり弱ってきているというような印象を持っています。そういう中で，いかにして教育学研究を志す，そういった修士の院生を各地から集めて，九大でしっかりと学んでもらうか，そしてその後，再度，教育学部を担う研究者として社会に，あるいは各大学に送り出していくかというような，これまで積み上げられてきた歴史の上に立って，何かさらに力になれないかというようなことを今，考えているところです。これから，まだ何も始まっていないところではありますが，いろいろと試行錯誤していきたいと思っておりますので，またアドバイス等をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

木村（拓） ありがとうございます。これまで，少々前置きが長くなりましたが，池田先生にお聞きいただきましたように，多分このスタッフが15人ぐらいの中で学内外の多様な課題，そして教育学ディシプリンから少しはみ出るような組織構成も含めながら，いろんなところに全力で，泣き言もいいながら取り組んでいます。その中で，次の世代につなげていくために教育学をどうしていこうかというところで，状況でございます。

今，お聞きいただいたとおりが，なかなか私たちも全て全員の何やってるかっていうのがこういうのに一堂に会して聞く機会っていうのは，結構なかったのではないかなと思っております。

それでは前置きが非常に長くなりましたが，先生からご示唆と話題提供いただきまして，また皆さんとディスカッションさせていただければというふうに思います。それでは池田先生，どうぞよろしくお願いいたします。

池田 ありがとうございました。皆さんとは，既知の方，再会できた方，まったく新たな出会いとなった方まで，いろいろでした。皆さんのご専門をお聞きしていると，学部と大学院で私が学んでいた当時と同じように，九大の教育システム専攻は学際的な学びを求める人には何にでもトライできる環境になっているなという印象をもちました。きょうは，先生がたのお話をお聞きしながら，教育システム専攻という組織名にこだわらず，専攻コミュニティというふうに呼ばせていただきます。大学におけるコミュニティというのは，集った人々が互いに切磋琢磨して人としての価値を高め，何かを創造的につくり上げていく場です。そういうコミュニティとしてこの専攻を受けとめたいと思いました。きょうの私の話題提供の内容ともうまく繋がることになりますので，早速，お話をさせていただきます。

木村（拓） はい，お願いします。

池田 パワーポイントのプレゼン資料をこの１週間ぐらいで集中して作らせていただきました。学術共同研究員を１年間させていただいたお礼もかねて，九州大学の専攻コミュニティの先生がたに対するメッセージを何かできないかなと思って新たに準備しました。特に竹熊先生には研究員としての処遇ではいろいろリーダーシップを取っていただきました。ありがとうございます。

私の2021年のポジションの現況ですが，メインは個人事業主として働いております。大学の未来を面白くするというミッション・ステートメントを掲げて，Ｕ＆Ｃストラテジーの名称で教育コンサルティング業を立ち上げました。他には，愛知江南学園の非常勤役員，そして大阪の追手門学院大学の非常勤講師をしております。追手門学院大学では経済学と経営学を統合する大学院改革に携わり，そのなかに大学経営の専攻を新設できたこともあり，非常勤ということでいまだかかわっています。コンサルティングとしては岡山の就実学園でアドバイザーとして教育改革のお手伝いをしております。文部科学省の改革施策を自大学に合わせて取捨選択して実現できるようなアドバイザー

の役割を担っています。今年も継続していますが，特にカリキュラムの質保証の具体化，教学マネジメントの進め方，中期経営計画における教育改革のテーマ進捗にアドバイスを行っています。というような現況です。

さて，この話題提供のテーマです。主題を未来の大学論，副題を学びの生産性から問い直す，としました。戦略的思考法を大学経営に活かしていくというのが，私の専門アイデンティティーです。未来の大学の経営戦略として，学びの生産性という言葉をごく最近使い始めました。まだ人に話しても，なに？と問い返される言葉です。

教育に生産性の言葉は必要とされてこなかったと思います。教育哲学の先生がたもここにいらっしゃいますので，本当に必要でないのか大いなる議論を期待できます。私は研究の生産性と同じように，必要になると思います。生産性の言葉は有限の資源とコストを意識することから始めます。国からの教育改革は大学ごとに異なる資源とコストにはほとんど触れずに，これをやりなさい，あれをやりなさいという，外から球をどんどん投げてきます。それらを実行に移す大学では使える資源とコストを個々に配分し直すことが必要になります。

コストはお金や時間や努力。資源は人や物や情報などいろいろあります。研究と同じように教育や学習でもこれらをうまく活用すれば面白い成果が生まれます。コストと資源に対する成果の関係を念頭に置けば，ここから効率性の考え方も重要になります。生活時間を際限なく削って成果を挙げることを組織的に強いると，教育と研究の仕事ではあってもとんでもない事態をもたらします。現実の問題として先生がたはそれに抗えない状況に追い込まれてますから，そういう意味でも効率性の考え方は大事です。

それから教育改革に伴って大学には説明責任という考え方が求められるようになっています。行政の説明責任じゃなくて，大学の現場で起きている変化をきちんと外部に発信していく責任です。外部の眼を意識することが大事になるにつれて，教育にも生産性の認識が登場してもいいなと考えます。研究の生産性という認識は，国際的にも共通に認識されています。最近ではとくに理系分野では専門的な指標の一つにインパクトファクターまで重視されるようになってきています。指標があまり複雑になりすぎると問題ですが。研究の生産性については，理系では甚大なコストやリソースを使って大きな成果が産み出されています。

研究の生産性はわかりやすい言葉なので試みに具体的に書き出してみました。まずコストとリソースです。まず学内外に研究費を申請して採用されると，投入できる時間や努力量を確保する。テーマに沿って図書，文献，資料を購入し収集する。そして調査，実験を企画する。この段階から人や物などのリソースの活用が始まります。それから学内外の学会，研究会に参加して意見交換や交流を行い，人的ネットワークの活用をします。こうした活動はもはや当たり前のようになっています。

その結果は，成果物としては学会で単独や共同の発表をやります。かって名古屋大学にいたときですが，旧帝大の人たちがどのくらい研究論文を出しているかを調べたことを思い出しました。理系分野でしたが年に10本論文出している方がいらっしゃいました。単独ではなくて共著論文がほとんどでしたが。共著論文が常態ではない文系の場合はこの生産性の高さをつくるのは難しいと感じ

ました。

こういうふうに書き出しながら気づいたことがあります。それは生産性の成果を論文数だけでイメージしていいかということです。ピーター・ドラッカーの組織経営の方程式でいえば，人々がゴールや目標に向き合いながら自律的にモチベーションを持続させていくのがマネジメントのよきあり方です。これに立ち返ると，私のイメージした研究の生産性はインプットとアウトプットの関係でしか認識していません。コストと資源をインプット，論文数をアウトプットとする従来の生産性の議論です。研究する人が目指したであろうゴールの視点やアウトカムの視点は抜け落ちています。

どんな研究を目指すのかというゴール論をはずして研究の生産性を追求すると，毎年これだけ論文を執筆できたという数の問題に終わってしまいがちです。国立大学の法人化に総長補佐としてかかわった名古屋大学時代に，当時の松尾稔総長が研究生産性の考え方は変えるべきだと言われたことを思い出しました。インプットとアウトプットの関係で認識する生産性の従来の議論から変わるべきだと教わりました。しかし，そのころから20年近くたったいまでも，このインプットとアウトプットの認識から抜けきれていない自分がまだいました。

このような従来の認識をイメージ図で描いてみました。左側に大学のキャンパスの図，右側にインプットとアウトプットが産出される歯車が回るライン図，この二つを組み合わせたのがイメージ図です。インプット，スループット，アウトプットの関係は工場のライン工程のイメージになりました。この図では目指されたゴールとそれにかかわるアウトカムの関係が私たちの視野からはずれてしまいます。

インプット・アウトプット論の問い直しは，アウトカムの戦略概念が登場するようになった2000年以降は変わることが期待されたはずでしたが，外部や社会からの評価や第三者による評価の制度が足早に登場してきたためか，大学では自ら設定するゴールとアウトカムの関係のあり方を議論する時間はきちんととれずに，あいまいなままに導入されてきたように思ってます。

今回改めて経済学者のハワード・ボーエンが著した『学びの投資（Investment in Learning）』を読み直しました。大学院時代に出合った著作です。1977年に出版されています。この書物を40年以上たってから読み直し，意味づけを新たにしてみました。大学院時代の読み方は浅かったと思います。『論語』のなかの学而篇にある「学びて時にこれを習う」という深い学びを実践しました。大学が自ら設定するゴールとインテンディット・アウトカム（Intended Outcome）の関係を明確にして，そのプロセスの延長線上に個人と社会の両面における付加価値論にまで展開したのがハワード・ボーエンでした。この方の略歴をみると，政界とか産業界でも仕事をし，最後に大学に戻っています。大学の創造的な世界が好きだったから，こういう視野の広い認識が生まれたのではないかと勝手に考えました。

大学には，ヨーロッパ由来の教育，ドイツ由来の研究，そしてアメリカ由来の社会サービスの３つの使命が歴史的に形成されてきました。ボーエンはこの三つの使命を学びの価値という観点から統合しています。しかし，個人が活用できるリソースとコストを考えると，教員としての経験からはこれらのすべてに誠実に取組むことは困難です。ではどうすればよいのか。悩み深いのですが，

ボーエンの著作からの示唆は，有限のリソースとコストを前提において，学びがもたらす価値に着目して，教育と研究と社会サービスの活動と意味を統合的に考えていくという発想がえられます。

大学の教育，研究，社会サービスは直接にはコミュニティの活動から生まれます。そこでは教員，学生，職員，そして経営層がそれぞれのゴールに向かって協働しています。教育では，大学がシステムとして目指す幅広いゴールが存在しています。これらゴールの先に成果としてのアウトカムを想定し，さらにその先に個人的な価値と社会的な価値の獲得まで視野に収めています。これがボーエンの学びの投資の考え方の全体です。私はこれを学びの生産性として表現し直しました。

大学院と助手のときに高大接続の最適化研究に携わっています。成果は以下の論文として発表しました。共著者の高浦氏は院の先輩，中島先生は教育法制研究室の恩師，そして松永さんは院の同期生でした。これらの論文が高大接続のテーマの原点です。二番目と三番目の論文ではボーエンの著作を活用しました。そこには古今東西に共通する大学教育の目標カタログが作成されています。これらを日本語に翻案して調査項目を作って尺度とし，大学生がどのようなゴールを期待し，どのようなアウトカムを獲得したかの関係を調べました。この研究は九大から大学入試センターに職場を移った後もしばらく続けました。

1．高浦勝義・池田輝政・中島直忠（1975）「高校・予備校における教育・進学指導に関する調査研究」中村学園大学『研究紀要』，第８号，71－87.
2．中島直忠・池田輝政・松永裕二（1979）「学生の大学教育に対する期待」教育行政学研究，創刊号，77－110.
3．中島直忠・池田輝政（1981）「短大・高専・専門学校生の自校の教育に対する期待」教育行政学研究，第２号，１－14.

ボーエンの大学教育の目標カタログには，カリキュラムのなかで学ぶこと，学生生活を通して学ぶことのすべてが網羅されています。大学教育をシステムとして俯瞰できた人だからこそこうした幅広いカタログ作成が可能になったのでしょう。目標領域は知的学習（cognitive learning），情緒と道徳の発達（emotional and moral development），実生活上の能力（practical competence）から構成されています。私たちはこれを，高等教育の目標にふさわしい資質・能力として翻案し，全部で42項目からなる尺度としました。

調査結果を少し紹介します。教育原理を受講した九大生上級学年275名のサンプルです。とくに回答者数が多かった項目に注目しました。まずは知的学習領域のゴールです。「専攻領域に関する基礎知識を充分にもつ」には『必要不可欠』の回答者が７割でした。逆に『重要でない』の回答者は２％です。ゴールとして認識するか否かにかかわらず，アウトカムの状況は『身についた（充分に，ある程度）』の回答が62.5%，『身についてない』が36.4% でした。それから「自分の考えを筋道を立てて話す」，「日本語文献を読んで理解する能力」，「論文・レポートをはっきりわかるように書く」も『必要不可欠』が６～５割の高い回答でした。肯定的なアウトカムとしては日本語文献を読む力が88.3%，論理的に話す力は67.6%，論理的に書く力が52% でした。私の学生時代を考えると，「既成の権威にとらわれず，自由に物事を考える力」を大学に求める不可欠のゴールとして期待したと思

います。またそれは獲得できたと思ってます。

知的学習領域のなかで興味深いのが，「在学中に学習の仕方を学んでおく（Learn how to learn）」という項目です。看護など専門職を目指す学生は回答が高い傾向にあり，ゴールとして４割が意識してました。九大生は３割で他の９大学の中間くらいに位置してました。この項目は，魚を与えるよりは魚の取り方を教える，という諺があるように，方法論を学ぶという意味があります。これは今風に言えばメタ認知領域の学びです。いまだとこの重要性は理解できますが，当時の日本の大学教育では知的学習のゴールとして違和感をもったことを覚えています。

つぎの情緒と道徳の発達は価値観の学びにかかわる領域です。九大生の49.5% が「他人に対する共感や思いやり・協調性を養う」を必要不可欠のゴールとして回答しました。アウトカムとしては85.1% が身についたと回答してます。「自分の能力・志望・価値観を知る」や「自分がかけがえのない人間であることを自覚する」という自己発見の項目はキャリア教育の考え方の先取り項目でした。当時の九大生は前者には46.5%，後者が29.8% の回答でした。アウトカムとしてはそれぞれ78.2%，64.7% が身についたと回答してます。他にも「適切な自己主張・自信・自発性を養う」や「社会に対する関心や責任感を身につける」などの項目がありますが，総じて，大学教育がこれまでこの領域の学びに対してゴールやアウトカムに大きなインパクトを与えてきたことは間違いないと思います。このことの大事さを大学はもっと社会に説明してもいいのではないかと考えることがあります。

三番目の実生活上の能力に関する学びです。この能力観はコンピタンスの概念です。キャリア発達や開発・成長を見通すなかで登場するのがコンピタンスの能力観ですが，これが大学教育のゴールとして認知されたのは2000年以降でした。私たちの調査は時代に先行していたことがわかりました。九大生の41.5% が，「責任をもって物事を処理する姿勢・態度を身につける」を不可欠のゴールとしてます。アウトカムとしては82.9% が身についたと回答しました。他の大学も同じ傾向でした。「政治・経済・教育・福祉などの諸団体に，積極的に参加していこうとする態度を養う」や「じょうずな消費生活を送る方法を身につける」という項目には，九大生のそれぞれ6.9% と8.7% しか強いゴール認識がありませんでした。対応するアウトカムは22.5% と44.4% が身についたと回答しています。全体の特徴からわかるように，ゴールとして意図しなくともアウトカムとしては評価されることがわかります。想定のアウトカムと想定しないアウトカムの両面があることになります。

大学院での学びの生産性に戻りますが，当時の比較教育の岩橋文吉先生，権藤与志夫先生にもお世話になりました。高大接続の共同研究にも誘っていただいてありがたかったです。アンケート調査票の設計と統計解析の基本はこの共同研究に参加するなかで身につけました。これはカリキュラムのなかで学ぶのではなく，いわば徒弟制のように現場で学んでいったものです。

院生の私は米国の大学経営の歴史に関心をもっていたので，共同研究に参加しなければ統計解析のアプローチを学ぶのはもっと遅かったと思います。その意味ではその後のキャリアを考えると共同研究での学びの付加価値は大きかったと考えます。高大接続の研究テーマもその後の研究キャリアで継続できました。成長の機会を与えてくださった当時の中島先生や権藤先生などが意図されたことではなかったかも知れませんが，私にとっては学びのアウトカム，そして価値にまで展開でき

た貴重な経験でした。

私の独自の関心であった大学経営のテーマは2000年以降から戦略経営のテーマに変わってきました。戦略経営の基本となる戦略的思考法は科学的経営法の延長線にありますが，大学の世界では概念は別にしてまだまだ現場には浸透していません。大学の国際化を進めるにも戦略的な経営が求められます。私が未来の大学を面白くするという表現でコンサルティングに携わっているのも，大学院での学びの生産性と連続しているからだと見えてきました。

関連して，バリューの話しをまとめます。意図する学びのアウトカムを想定内，想定外を含めて短期的に身につけることによって，個人的そして社会的な価値が生まれる。個人的な価値としては次の職場，大学入試センターの仕事で生きました。そこに16年間いましたけども，職場の同僚と研究面でも協働できるレディネスが培われていました。本当にこれはありがたかったです。社会的価値はその先に行った私の仕事の評価にかかわるのでここでは具体的には触れません。

最後に，この専攻コミュニティーの皆さまに対する私からのお礼です。学びの生産性という言葉を図解してお伝えしましたが，大学という社会的存在の面白さを独自の形で表現させてもらういい機会となりました。ありがとうございます。大学が向き合う学びの生産性を問い直すなかで，大学には幅広い学びの目標があることを再確認できました。目標なき評価のあり方には私は常に批判的です。学びの目標を実現する過程はリソースとコストの質と量に左右されます。そう考えると，個人的には名古屋大学の高等教育研究センターでは費用や時間のコスト，そして人とモノと情報などのリソースには恵まれました。そこでの学びのアウトカムと生み出した社会的価値にはいまでも私は生かされています。

大学での教育，研究，そして社会サービスの仕事は一つ一つを切り離してやってきたわけではないこともわかりました。使えるリソースとコストを考えながら，生産性を高めるために，それぞれの仕事の成果を学びとして統合できたから，ここまで来ることができました。学びの意味をこのようにダイナミックに展開できるのが学びの生産性です。これは教員だけに有用な考え方ではなくて，学生も含めて大学の構成員にも適用できるはずです。大学院のときに比較教育学会の紀要に，米国におけるアカデミック・フリーダムの判例研究を発表しましたが，内容はもっぱら教師の教授と研究の自由でした。いまは教授の自由の根底には学ぶ自由があることを認識しています。その意味でも，大学の３つの使命を学びによって統合することは歴史的，学術的に理に適っています。

学びの生産性を図解することではっきりしてきた私の思いの幾つかをここに書かせていただいて，終わりといたします。教育か研究かという大学の歴史における論争は神話としてもう決別してもよいのではないか。学生とともに研究や探究活動をする。それが教育と研究の学びにもなる。学生とともに地域に出る。それが社会サービスの学びにもなる。学びのアウトカムはそれぞれによって違っていいわけです。教育か研究かという二項対立の考えは教師だけの世界に閉じることから生まれるのではないでしょうか。

それからカリキュラムに対する考え方です。個々に決められたコースを走るという語源の由来にとどまるのではなく，学びの経験を統合する意図でもって設計し開発されるというカリキュラムの

本質があるはずです。だからカリキュラムのゴールや順次性や体系性が大切な要素となっています。このカリキュラムの開発や効果についてもアウトカムやバリューまでを見通す学びの生産性から捉え直すことができます。ここから大学においてどのようなカリキュラムが戦略的に価値をもたらすかを議論できます。

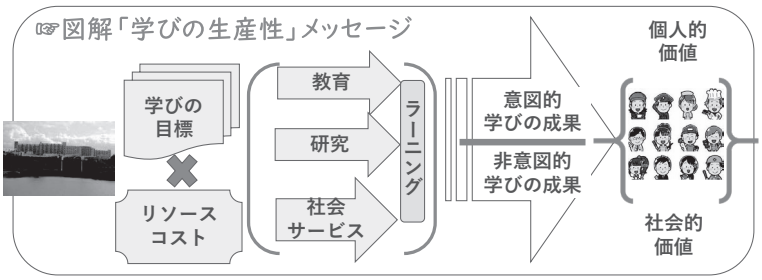
ある大学の経営トップの方ですが，大学の学びは教室が中心であるというメッセージを記した張り紙を出して，教室での学生のマナーのあり方に注文を出しました。一部の学生がこのメッセージに抵抗感をもち，自分はそうは思わないと反論しました。学生の反論は健全だと思いました。

教室でのカリキュラムの学びは，集中し効率よく学ぶ，相互に学び合う，そういう環境をつくる上で有効性が高い。しかし，こうした学びの生産性については，国や外部の機関の指導に頼るのは本筋ではなく，やはり大学のコミュニティにいる人々が知恵を出して解決していくしかない問題です。

私自身で描いた図解をじっと見ながら，あふれてきた思いを話しました。皆さんの自由なご意見をお聞きしたいです。ありがとうございました。

木村（拓） 池田先生，どうもありがとうございました。昔の話でいろんな先生がたがうなずいてらっしゃるというところも含めて，この話題を先生にお願いしてよかったとしみじみ感じているところであります。

先生がたからコメントいただければと思っております。その中で，問いたいポイントがございま



図解から導き出す私の想いのいくつか

○研究か教育かの二項対立の思考は神話として決別できる

○経験を統合する学びの生産性の考え方は個人と社会の戦略的な価値にまで視野を拡げることができる

○カリキュラムの学び（象徴的には「教室の学び」）は一部にすぎないが、効率と社会的説明責任の創意工夫にはコミュニティの知恵が不可欠である

皆さんの自由なご意見をお聞きしたいです!!!

す。やはり「意図せざる学び」みたいなところと共同研究のこととですね。冒頭に紹介させていただきました通り，九州大学の教育学のこれまでしてきたところ。いろいろ，先生がたから冒頭からお話しいただいておりましたところの，最終的な目的というか結節点はどこなのというところも含めて，少し話を進めたいというふうに思ってます。

池田先生の話も私，高等教育論でいろいろ学生と文献も読んでおりますが，やはり大学が何を目的とするのかっていうふう議論は，非常に難しい議論でもありながら，でも永遠のテーマであり，それが面白いテーマでもあるのかなと思い聞かせて頂きました。バートン・クラークが教員文化の複雑性みたいなものを指摘している。それがゆえに，その組織がどのように権力メカニズムとして動いているのかということが，社会学の考察対象であると述べています。また，大学という組織社会学の考察対象であるというところから，近年でいえばブルデューがやっぱり「界」という概念を使って，学問界ですね。そういったものの中で，それがどういうふうに社会統合の原理につながっていくのか，それが社会学としてどう見えていくのかっていうところの話にも通じるのかなと。実は池田先生，具体的にお話しいただきましたけど，それらの社会学的なパースペクティブにつながる概念をお話いただいたのではないのかなと思ってます。

先ほど先生がたがたくさんお話くださったように，われわれが今，いろいろ専攻や部門や部局の中でされていることがあります。池田先生のお言葉を借りていうなら，少ないスタッフでリソースが限られてる中，多種多様な短い時間では語りつくせないことを，多分，それぞれお互いが何を日々しているのかもあまり知らないところもあったかと思います。そういう意味では，専攻 FD というのは，一つの機会であるのかなと私も思っていたところなんですが。その中で無秩序になってはいけないというメッセージなのかなとも感じながら拝聴しておりました。

R. バーンバウムという人が『大学経営とリーダーシップ』の本の中で，大学の文化を，システムを四つの類型に分けて同僚平等型，政治型，官僚型。これはトップダウンですね。それと無秩序型とこの四つに分けて，四つに全て分けられるんじゃないけど，いろんな類型があると書いている著作がございます。これを踏まえて考えれば，池田先生の話の中で学びに統合するっていうのが，単純な意味での「学び」という日本語に変えてはいけない，というメッセージも込められてるのかもしれませんが，「ラーニング」というところに統合するというところで，九大教育学の中で，あれもこれもやってますが，その中で学生がやっぱりどう伸びるのか，それが次の教育学につながっていくのか。どういう組織であるべきなのか，何かそういうご示唆をいただいたような気がします。

先生がた，専攻とか系部門の中でもいろいろ，私も去年，系世話人だったのでいろいろやってきましたけど，先ほどの先生たちのお話の中で，いろいろ先生たちチームになって動かれてるところもあろうかと思います。そしてまた去年，系世話人として私が皆さんにお諮りして，部門内のプロジェクトをつくりましょう，という提案もさせて頂きました。これ，竹熊先生の案がきっかけで規定なんかを私のほうで作りましたが，部門内の研究プロジェクトであり，申請すれば，私たち研究グループですよ，という明示的なグループ形成。そういった仕掛けもつくらせて頂きました。宮本先生がそれの初代研究リーダーのユニット長として申請いただいたというところでもあります。

なので，これから少し先生がたにもご意見をお伺いしたいなというふうに思いますけど。一つ，お話しいただきたいのは共同研究とか，共同で部門の中でやっていくことの意図した結果と意図せざる結果があったのか，そして私たちは教育と研究と，いろんな目的をいろいろ重ねて，なるべく少ないスタッフの中で国際コースをつくらなければいけないとて，学生も海外に連れていくし，竹熊先生たちと私で，アジアとの国際高大接続とかも研究もしようというような形で，なるべくつなげていこうというような形でしてきました。そうした中で副次的な効果といいますか。われわれがやってきたものの副次的な効果がもしあれば，そういったところも何か言及していただいて，われわれがイメージを共有できる一助にできればなと思っているところです。

いくつか研究グループの話が出てきましたけど，例えばアントン先生，藤田先生がアテネオとかでやられて，陳先生たちとビッカーズ先生たちとやられてる中で，学生の副次的な効果として少し言及されていたと思いますけど，何かその辺りで付け加えられることとかって，このことを，まず，最初にお聞きしたいなと思ったんですが，何かございますでしょうか。

アテネオのときに，いろいろな先生たちとその研究室の学生が共に学び合って研究していくことの意図した成果といったものもあるかと思うんですけど，やってみられて意図してなかった，これはこういう成果もあるんだというものがあったら教えてほしいなと思ってます。

アントン　私の日本語がまだまだで。何ていうんですかね。意図していたところは本当に発表の場として，交流の場としてだったんですけれども，意図しなかった意外な結果としては，一つは海外の方々と一緒に発表する。かなり若手の人たちが一緒に発表していて，ファーストタイムの方もいらっしゃるし，そういうふうに緊張して発表して，一緒にやって飲み会に行くと，かなり学生の間の交流，香港の方とかイギリスの方とかと同時に日本の方々がいろいろ交流して，その後でも交流が続いてるという話も聞いていて，そういうふうに学生の研究者交流の最初のステップとして，それが一つ，大きな結果になってるのかなと思います。

また，半分は意図してたんですけれども，英語で発表は無理でしょうという中で，どうにか克服する場として機能しているのかなと思って。でも，ちょっときょうの生産性的に考えるのは初めてですし，今後はより意識して考えてみたいなと思っております。

木村（拓）　藤田先生，具体的に博士課程の学生に発表させておったり，アントン先生の学生だった，京都大学に行った大学院生も発表してたような気がしますけど，どうですか。

藤田　面白いなと思ったんですね。１人の発表に対して，学生，教員の発表を学生がコメンテーターっていう形で，直接に批判をぶつけたりするんですね。学生であるから手加減するとか，教員だからリスペクトするとかっていう気持ちは一切なく，同じ研究者として同じ土俵で戦ってるっていうのをずっとやってきているっていうのは，学生たちにとって非常に刺激が高かったんじゃないかなっていうふうに思います。しかもそれが慣れない英語なので，格闘しながらやるっていう。

木村（拓） よく分からないところで成立，普段，僕らが日本語でやるとやっぱり遠慮したりとか，日本人がどうしても出てしまうようなところが，少し英語でやると抜けてしまうところもあったりするのかなと思いながら聞いてたんですけど。そういうとこに学部生とかもあったりするんですか。

藤田 学部生いましたね。共創学部の学生が入ってました。

木村（拓） なるほど。そういう意味ではアントン先生が教育学部ではなくて，共創学部の担当で大学院で私たち九州大学教育学とつながっていっていただいてるという，学内のつながりみたいなものもあります。それが九州大学教育学の広がりとしてあり，そしてそこから，ヴィッカーズ先生や陳先生を中心に，香港であるとか，中国であるとかにも，繋がってきました。私も九州大学教育社会学のご出身で，北京大学の鮑威先生とよく学生と一緒にミーティングしたりします。また，来年からは，南京農業大学にいらっしゃる九州大学教育社会学ご出身の張春蘭先生から，留学生の推薦をいただきました。そんな素敵なご縁もあります。こうした九州大学教育学のつながりがオンラインもコロナも含めて広がって，そして竹熊先生がおっしゃった教員組織の国際化も含めて，私たちの学生がまた私たちとは違った育ち方をしてるっていうところが興味深いなと思っているところです。

野々村先生，教育基礎学研究のところでの話とかっていうのは何か，木村政伸先生と江口潔先生と鈴木篤先生と藤田先生と，皆さんでやっておられるかと思いますけど。

野々村 哲学と歴史で，私の先代のところからやっていたと思うのですけれども，紀要を発行するというのと，合宿形式で発表とその研究交流ですね。今，おっしゃっていたように教員であるとか学生であるということではなく，批判をしあう，議論しあうっていうのはそういうところにあるのかなと思いました。政伸先生は九大に帰っていらっしゃる前からずっと関わってくださっていて，教育史，教育哲学，基礎学の議論をみんなでやるという意味では，初学者というか学部生の学生も，博士課程の院生や教員の発表を聞きながら議論するという，それこそ徒弟制的な部分が大学にあると思うのですが，私も含めてそこで鍛えられてきたところがあるので，重要だなと思っています。

木村（拓） 木村政伸先生。今，木村政伸先生も九大帰ってこられる前からという話がでまっしたが。鈴木先生も九州大学に着任前から関わっておられるのは，僕もお伺いしたときにいらっしゃったの存じ上げております。木村政伸先生，何かご自身の院生生活とか九大の先生の思い出とか，こういった鍛えられ方があったみたいな話はありますか。

木村（政） 先ほど，池田先生の発表を聞きながら，大学の研究をされましたよね，教育行政研究の。

池田　はい。

木村（政）　あれ，だいぶ下働きをした記憶がありました。

池田　そうですか。

木村（政）　当時，ほとんど手作業で集計かなんか，一生懸命，学部生だったときやったんですよね。

池田　そうでしたか？

木村（政）　はい。私，仙台大学かどっか一生懸命やったような気がするんですけど。

池田　ありがとうございます。

木村（政）　話，聞きながらすごく思い出しました。ちょっと少しずれるんですけれども。先ほどのことでいくと，私，学部か大学院が金子茂先生やったんですけど，とにかく正直いって厳しかったです。本当，涙がちょちょ切れるぐらい怒られました。結婚式ぐらい褒めてくださいっていいたかったんですけど，結婚式でもなんかいろいろ怒られました。でも，すごい厳しかったんですけど，今から思えばすごいそれは財産になったと思います。これは私も学生や院生には言うんですけど，優しいのと甘やかすのは違うだろうと，厳しく言うのも優しさだ，とかって，自分で一生懸命，開き直ってるんですけど。ただあんまり言うと最近だと何だかな，パワハラとか言われてちょっと面倒くさいことになるんですけど。私自身は自分自身が受けてきた教育が経験的には間違いじゃなかったと思っています。それは非常に今でもやっていってるつもりです。

もう一点は教育史は当時，日本教育史の院生は私しかいなかったので，一人ぼっちで研究やってたわけですけど，助教授でこられた新谷先生っていう方が，東大の寺崎ゼミ，そこの出身で，そこの院生との一緒の勉強会，あるいはゼミ旅行を参加させていただいて，出身大学を超えた交流というのを意図的につくっていただきました。やっぱり一つの大学だけの先輩後輩関係の中だけではない，大学の枠を超えたところで研究をやってきたっていうことが，非常に私にとっては今でも財産になってます。それは，今の院生にも機会があれば必ずそういうことは言ってるんですけど，とにかくいろんなとこで自由に飛び込んでいって，いろんな人と議論を戦わして勉強していくことは非常に大事だということを言ってます。

それからすいません，ちょっとだけ。今度，私の仕事の話なんですけど，今，基幹教育院というところで，さっきちょっと話をしようと思ったんですけど，時間がなかったんですけど。私，今，初年次教育の１年生の全学必修科目の基幹教育セミナーというのを担当して，責任者なんですね。

これはこの６月から始まるんですが，大学での学びをもう一回，問い直す。４月に入学して大体５月の連休ぐらいから学生だれてきますので，そこからもう一回，６月からむちを入れるっていう，そのために自分を問い直す，自己開示をしながら，他の学生とアクティブラーニングをやりながら，これから先４年間，あるいは６年間の学習を考えていくっていう授業なんですけど。これの責任者で，先ほどチームでっていうことでいくと，今８人ぐらいの文理合わせて８人，さっきのアントン先生も入っていただいてるんですね。８人ぐらいでその企画をずっとやってるんですね。

その中で痛切に思うのは教育学のもともとベースのない先生がた，特に理系の先生とのコミュニケーションですね。教育論の難しさ。難しいんだけど面白いんですよね，逆にいうと。そんな発想でくるのかっていうですね。大学ではどうあるべきかとか，学びとは何なのかっていうことについて。例えばこの Zoom でも顔出しするかしないかだけでも，延々と議論をやってて，これはやっぱり教育学の狭い中で，狭いっていうか教育学の仲間だけでやっている議論では得られない，非常に貴重な経験になってます。いい悪いは別として，とにかく違う文化の人と話すってのは面白いですね。

もう一つは基幹教育セミナーを担当してて思うのは，私はこの九大きてもう４年目，もうすぐ５年になるんですけど。実をいうとずっと再履クラスなんですよ，担当が。毎年2600人の中で大体1.5パーセントぐらいが落としてしまって，でも卒業必修ですので，必ず単位を取らないと卒業できないっていうんで，再履修クラスをつくって，そういう学生だけ集めたクラスを担当してます。これは，苦痛っちゃ苦痛なんですよね。すいません。やりがいはあります。理系の先生はあっさり，そこではばっさり切るんですけど，やっぱり教育学部なので，なぜ落としたのか，なぜ大学の学びに前向きになれないのかっていうところの，いろんなつまずいたり，課題抱えてたりするのを，一人一人，気持ちをほぐしていって，手間暇かかるんですけどやっていくっていうこと。そんな学生がこの九大の中には1.5パーセントか２パーセントぐらいいるっていうことで，私自身も教師として鍛えられてきた。またこの６月からまた再履クラスが始まって，どうしようかなとか思いながら悩んでるんですけど。先ほどの池田先生の話は非常にそういう意味では参考になりました。大変ありがとうございました。

木村（拓） ありがとうございます。教育社会学のほうも，現在，名古屋大学，筑波大学，九州大学と合同ゼミを行なっております。オンラインと合宿と毎年やっていたり，九大の教育社会学の紀要の方に，合同ゼミで発表してもらった名古屋の院生や筑波の院生の皆さんに投稿してもらったりとか，ちょっとそういう広がりも仕掛けとして行なっております。実は，木村先生の九大院生時代に，東大の寺崎ゼミと交流した，というその話を基に，自分でも計画してみようと思い至り，大学院生を鍛えるために実施しました。学部生も参加しております。

また多分，重要な話だと思うんですけど，九州教育学会という地方学会で大学院生が発表したりして，福岡大学とか西南学院大学とか大分大学とか鹿児島大学とか長崎大学の先生，OB の先生方も多いですが，その方たちと議論するという場も，私たちにとって重要な教育機能ではないかと思っ

たりします。

元兼先生と岡先生。韓国の公州との交流とか，そういったところでのつながりとか，学生見てての意図せざる結果。意図した結果と意図せざる教育効果みたいなものが，もしあればコメントいただければありがたいなと思います。

岡　じゃあ，私からですね。今の公州のことに関して一つと，あと池田先生にご質問させていただいてもいいですか。まず公州に関しては，私自身が非常にローカルな人間だったんですけれども，先ほど学生の国際化への入り口になるっていうことでしたけれど，その前に教員にとっての国際化の入り口だったみたいなところがあって，大学として国際化に取り組んでいくっていうことは，もう教員としてやむを得ざる中で，やり始めるわけなんですけれども，本当に異文化の人と同じ教育学を議論する楽しさっていうものを感じさせていただけるきっかけになったなっていうふうに思っていますし，そういう機会じゃないと，なかなか横の，お互いの研究を知るっていうことが難しいのが大学の現状という意味では，教員間の研究交流にもなってるし，もちろん大学院生の専門をまたいだ交流の機会になってるっていうのが，国際化だけではなくて，うちの教育力の向上っていう意味ではつながってるのかな。そういう意味で教育と研究が非常に合致するっていう点はあるなっていう感をすごく思ってきました。

すいません，ちょっと池田先生への質問をして，いつかお答えいただけたらうれしいんですけれども，教育っていうのが九州大学，本当に難しいなっていうふうに思うんですけれども，何せ他大学よりはるかに構成員が多様だなっていうふうに思うんですね。学生，院生のですね。社会人もいる，留学生もいる，非常に多様な中で教育っていうのをやっていく難しさっていうのをずっと感じてきたんですけれども，一方で研究的な成果も上げなきゃいけないっていう，どちらかというと教育と研究の二項対立的なところで，私はまず考えてきたところがあるんですけれども。もちろん先ほど木村政伸先生が違う文化に触れるのは面白いっておっしゃってました，まさにそのとおりで，そういう違いが交じり合う面白さをつくり出すことはできるだろうとは思うんですけれども，まだちょっと私の中で教育と研究の二項対立を超えるこの多様性の中で，どうその二項対立を超えるっていうのをつくり出したらいいかっていうことに，まだちょっともやもやとしたものがありますので，少しアドバイスをいただけたらうれしいなというふうに思っております。すいません。以上です。

木村（拓）　池田先生，コメントがあれば，お願いします。

池田　そうですね。今は，大学を，組織を離れて家でほとんど仕事しています。ほとんどが研究活動です。社会サービスとしては大学の教育改革に対するコンサルティングの仕事です。研究はそのためにやってます。大学にいたときと違って，今までやってきた知見にプラスの新しい意味を見つけること自体を楽しんでいます。新しい要素を発見して，それを問題解決のために翻案して，大学

で働く人たちにコンサルティングを通していく伝えていく。これが研究する学びのモチベーションとなっています。

教育活動は非常勤の仕事がモチベーションとなっています。その非常勤もあとわずかですが。これまでの教育を振返ると，学ぶモチベーションを失ってる人，精神的に何か問題を抱えてる人，いろんな学生がいて，学修者本位という，一人ひとりの成長を意識し始めてからは教育はある意味では精神的にはストレスの多い仕事でした。とくに教養教育での学生の学びの目標は，持たない人，単位さえもらえばいい人，もうばらばらでしたから。

だから与える教育の考え方を変えざるをえませんでした。個人によって学びの目標が違っても，教室に来てくれればプラスの何かを与え，本人なりに何かを獲得してもらい，楽しく学んでもらえばよし，という考え方に変えました。これは学ぶことの最低限の楽しさを確保してあげることでした。遅れてきたから授業を受けさせないのではなく，授業は最後まで頑張ることを伝えました。工夫は一方的な講義の時間は大胆に短くしたり，教材開発への学びを楽しむことにし，受講生のさまざまな学びを認めてそれを共有する時間も多くとりました。授業に出席し続けることで学生は最後に何かを学ぶことを実感しました。授業の問題学生でも最後まで見捨てないという姿勢を取れるようになってからは，学生も授業への態度が変わることに気づきました。しかし，学部段階の学生の教育はいまでも本当に難しいと思います。ともに学ぶことが前提となる大学院は別物で楽しかったです。

木村（拓） そういう意味では池田先生，研究大学で九州大学という立場であれば，教育を何も分かりやすくデフォルメして教えるのではなくて，共同研究の話もそうですし，自身の研究を高水準で保っていく後ろ姿を見せることが教育になる，稀有な存在でもあるのかなと思ったりもします。それはそれであるけれども，そうでないときにも自分たちが面白いと思うことをいかにうまく伝えて，学生の学びを刺激していくのかっていうところは大事なのであろうとは，個人的には考えています。

池田 どの水準の大学であれ，やはり何か学んだことに対してはそれを表現させるというのは有効だと思います。ただ聴かせるよりはそのほうがいいですね。書くという行為は授業のなかでずっと続けると学生はできるようになるんです。二百名くらいの大講義室でただ聴くだけの問題学生は結構いましたから，毎回の授業では全員にその日学んだことを自由に書かせることに変えました。レポートの内容はいくつかピックアップして教材のなかに取り込み，つぎの授業で紹介して知的な刺激を与えたりして，何とか授業に来るモチベーションを最後まで引っ張るようにしました。そこまで手がかかる学生はそんなに多くはなかったのですが，これは私学での経験です。ひどいときには，授業で出席登録したらそのまま教室をでる学生もいました。九大はどうか分かりませんけど。

木村（政） 九大もいっぱいいますよ，先生。

池田　そうですか。

木村（政）　私がその担当ですから，１年生の。

木村（拓）　元兼先生，ひと言いただければ。

元兼　今日はありがとうございました。冒頭で，先生から「専攻コミュニティー」という言葉をいただいたことが印象的でした。本日のいろんな先生がたのお話もそうですし，先ほどご紹介した公州大との学術交流の始まりも，もともと公州大学自体がお互いの研究を知るために，そういう FD の場を設けていて，そこに相乗りすることから始めました。それ自体はすごく大事だと思う反面，私はずっと55年間，福岡県にいるんですけども，そうするとやはりいかにウチに閉じないようにするかっていうことを考えます。先ほどご紹介したように以前，私の学生時代は３人の教官でやってたような分野（教育法制，教育行政，学校経営）を今は私１人でやらざるを得ない，そういう状況なので，他大学からいろんな先生を連れてきて，院生たちにいかに刺激を与えるかっていうことをずっと考えています。科研などの研究活動も全部，ソトへソトへと広げて考えてきたし，先生方もそうだと思うんですね。研究自体は分野ごとに全国展開されている一方で，大学として，なんでしょう，研究も教育も「九州大学で」とそのデパートメントを強調されることとの関係をどう捉えたらよいのかというのが１点目の質問です。

もう一つ，「二項対立を超える」っていうお話をいただいて，以前は確かに背中で教えるというか，研究すること自体が教育になっていたと思うんですね。それに対し，私は，それこそ鷲田小彌太の『大学教授になる方法』の時期から入って，研究と教育を分離し，むしろ教育をパッケージ化させられるとか，先生がされていた「成長するティップス先生」の大学の教授法，そういうスキルを身に付けよとか，そういうことをすごく言われるようになった世代なんです。つまり，二項対立を超えるどころか，分離する方向で国から求められてる気がしてならないんですけども，その辺りどう考えたらよろしいでしょうか。お願いします。

池田　『成長するティップス先生』」を出版した目的は，教え方の方法論を学んで共有してもらうことでした。先生方は外部からの押し付けを嫌がりますから，自発的に教え方を改善してもらうことでした。2001年の出版の頃は，先生方の意識は教える立場，学生は学ぶ立場という，いわば二項対立の状況でした。今はその当時とは認識が徐々に変わり始めていて，教師も学生もともに学ぶという観点で同じ地平に向かっていける状況が生まれ始めています。授業では教師の目は学生には意識してもらうこと，そして教材や課題は教師が準備することに変わりはないですが，課題に取組む過程では教師も学生と学び合うことを楽しむなど，教える立場と学ぶ立場の区切りを意識しないようにしました。私はこういう態度で二項対立を乗り越えてきましたが，これにはかなり時間がかかりました。

木村（拓） ありがとうございます。最後になりましたけど，竹熊先生のほうでも教育学系から，田上先生と私。教育心理学系の伊藤先生を巻き込んでいただいて，科研をしていただいたりとか，いろいろ比研の話とかいろいろ積もる話があると思います。まとめも含めまして，どうぞよろしくお願いいたします。

竹熊 時間的にはちょっともう今，超えましたね。池田先生，ありがとうございました。とても興味深い啓発的なお話を伺えたと思ってます。木村先生はすごく熱心な先生なんで，休憩時間も入れずにずっとここまでやってしまって，すいませんでしたというか，ありがとうございます。木村政伸先生のお話伺えたっていうことでお分かりと思いますけど，私にとっては池田先生はもう先生の世代なんです。政伸先生は私の先輩なんですけど，池田先生は随分，遠くの年の離れたおじさんっていう感じの，そういう感じの近さを感じてます。池田先生がおられた頃の，学生運動のこと，ちょっと木村政伸先生，言われてましたけど，六本松とかにトイレは穴が開いてるし，全共闘の壁書があったりして，本当，大学のトイレは使えないようなところだったんですけど，昔は。ちょっとその六本松の写真はないんですけども，箱崎の写真がありますので，ちょっと見ていただこうかなと思って，少し用意してますので。共有できますかね。

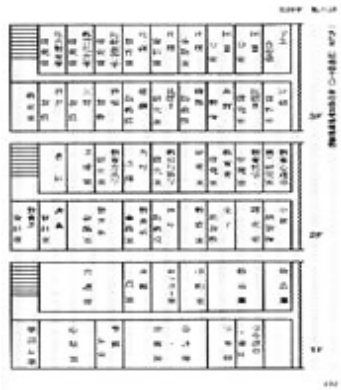
これは既にもうないところですけども，ちょうど私は池田先生とお話，これ見ながらお話しさせていただきたいと思いますけども，以前から先生のお話を伺ってて，先生がたの院生時代の武勇伝っていうのも伺ってて，中洲で飲みにいって道路で寝っ転がってたとかいう話があって，すごいなということが一番バンカラなお話しが記憶に残っています。とてもスタイリッシュな先生なんですけど，実はそうじいうところだけじゃないんですよって話を，ちょっと皆さんにお伝えしようかなと思って。

木村（政） 池田先生が空手部だからね。空手部だから。

竹熊 私たちの頃は院生がとても少なくて，よく先生同士もけんかもやってたっていうこともあったんですけど，先輩たちがいたからこそ何とか学び続けることができ，そういう院生同士のつながりとかで，先輩方をたくましく心強く思って，何とか乗り切ったんじゃないかなと思ってます。この写真ももうなくなっているところですけども，教育学部への貝塚キャンパス門ですけども。ちょうど木村先生からお話がありましたように，当時は，経済発展の社会風潮があって，人口増加がしてて，大学進学率が15パーセントぐらいですか。九州大学も非常にエリートとしての大学を維持してた頃だと思います。むちゃなことばかりじゃなくて，昔のバンカラな雰囲気も残しているんですが，とても真摯に社会に向かって取り組んでいってる，

自由闊達な学問の自由ってことも言われてましたけど，そういう知を追求する姿勢っていうのは，やっぱり私たちよりもとても強くお持ちだったんじゃないかと思ってます。

今の学生さんっていうのは業績とか成果とか，研究成果とか学位とか，そこら辺を目的にしてきてるっていう感じが特に強く感じます。卒業しないといけないんで，それはもちろん絶対なんですけども，もっとそれより大事な教育的な意義とかいうことを，私たちはやっぱり意識しなくちゃいけないし，多分，池田先生がたはとてもそういう社会問題を解決しなくちゃいけないっていうような気概とか意欲っていうのを，当時から強く持ってられると思うんですよ。先生のお話の中でも十分，伺うことができたと思いますけども，池田先生を再びこういう形で教育学部，大学院のほうにお迎えできるようになったっていうことは，私たちの組織として，コミュニティーとして，とても喜ばしいことだと考えてます。先生をお迎えして，また一緒にそういう共同のお話ができるっていうことを期待しておりますけども，私としてももうちょっと襟を正して，先生のバイタリティーさとか真摯な研究姿勢からもう一回，学び直していければと思ってます。これからどうぞご指導，ご鞭撻のほど，お願いいたします。ちょうどこれが先生がたがおられた頃の研究棟での教員配置図だったと思います。



池田　そうですね。

竹熊　どうもありがとうございます。

木村（拓）　ありがとうございます。池田先生，何かひと言いただけますか，最後に。

池田　本当にこういう機会を与えていただいてありがとうございました。先生がたの出身は外と中，専門の学問を含めてさまざまですけども，当時の九大の教育学部の先生方も多様性に富んでいたというのが印象でした。私が学んだ教育学部は教師養成に特化しない学部だったので，学生としては明確な学部のアイデンティティーをもちにくくて，企業面接では説明するのに苦労したことを思い出しました。だから現在，教育システム専攻コミュニティーの先生方のアイデンティティーは何なのか，ミッションとしては何を掲げていらっしゃるのか気になりました。専攻の中期計画を竹熊先生から見せていただきましたけども，教育の国際化戦略が一つのアイデンティティーになってますよね。その気風は私たちの頃も意識していましたから納得です。

もう一つは教育システムのなかで人の発達・成長のあり方を探求する学術戦略もアイデンティティになると思いました。これは広い意味での教育学の本質になるかなと思います。最近，福岡でフリースクールの人とネットワークで会う機会がありますが，学校教育についても，付属ではない形で何か面白い学校を起業するような人材を育てたり，あるいは地域のニーズと融合するような面白い実験学校をつくるような目標を学生・院生の方々と戦略にできるといいかなと，そんな思いを巡らしながら皆さんのお話を聞いておりました。

木村（拓） 池田先生，ありがとうございます。実験学校を作ると全く同じではないですが，そういった話はたびたびどこの学校設置に加わろうかとか，いろいろ話は私どもにもきていて，様々なところで関与させて頂いているところであります。

本当に池田先生，長時間にわたりまして，あと専攻の皆さまがた，長時間にわたりましてご協力いただきましてありがとうございました。またわれわれ，また部門長が将来構想されるかもしれませんが，それに生かしていただければありがたいなと思うと同時に，またこういう記録を紀要に残しておけば，誰かまた後の世代に，池田先生のような立場で呼ばれて，つないでいっていただけることもあろうかと思います。また，そういうふうに呼んでいただけるような学生を育てていければといいなと思っております。

それでは，これをもちまして専攻 FD を終わりにしたいと思います。池田先生，貴重なお話，どうもありがとうございました。

池田 ありがとうございました。頑張ってください。

（了）

註

（1） 例えば，過去の紀要には，研究分野を横断した研究グループによる研究も存在する。

1973-1974科研費総合研究（A）「大学進学前後における生徒・学生の学習適性に応ずる教育・指導の研究」（代表者：岩橋文吉）

1976-1977科研費総合研究（A）「後期中等教育の多様化と高等教育への接続に関する総合的比較研究」（代表者：岩橋文吉）

以下，九州大学教育学の紀要に掲載されている当時の共同研究の成果である。

岩橋文吉・大村彰道・高文義・橋迫和幸1972：「高校調査書（内申書）に関する調査研究（第一次報告 ── 調査書作成の現状」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』18集，pp.37-68.

中島直忠・西睦夫・河村正彦・堀和郎・原俊之1972：「大学入学試験に関する調査研究 ── 推薦入学方式・高等学校調査書の利用を中心として」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』18集，

pp.69-104.

中島直忠・西睦夫・高浦勝義・堀和郎・河村正彦1973：「大学入学試験に関する調査研究（続）── 入学者選抜をめぐる教官の意識を中心として」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』19集，pp.27-60.

岩橋文吉・大村彰道1974：「高校調査書（内申書）に関する調査（第二次報告）── 記載内容の問題点とその補正」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』20集，pp.33-68.

中島直忠・橋迫和幸1974：「高等学校の進学指導等に関する調査研究」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』20集，pp.69-104.

権藤与志夫1974：「高校生の進路決定に関する諸要因に関する調査研究（その一）」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』20集，pp.105-122.

西睦夫1974：「高校生の進路決定に関する諸要因に関する調査研究（その二）── 進学志望校決定に関連する諸要因」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』20集，pp.123-136.

岩橋文吉1975：「高校教育と大学教育の接続の最適化に関する調査研究 ── 高校における実態と問題点：学校格差による類型別ケース・スタディ（その一）」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』21集，pp.15-32.

権藤与志夫1975：「高校教育と大学教育の接続の最適化に関する調査研究 ── 高校における実態と問題点：学校格差による類型別ケース・スタディ（その二）」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』21集，pp.33-48.

権藤与志夫・樋口嘉一1977：「後期中等教育の多様化と高等教育への接続に関する研究 ── 高校班」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』22・23集，pp.17-54.

中島直忠・西睦夫1977：「大学と高等学校の接続に関する事例調査研究 ── 大学班」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』22・23集，pp.55-72.

岩橋文吉1977：「後期中等教育の多様化と高等教育への接続に関する研究 ── 外国班及び総括」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』22・23集，pp.73-88.